

発刊に寄せて

「かいほつのみち」の発刊、心からお喜び申し上げます。この本は特殊教育部設立四十周年を記念して作られたものであり、特殊教育部が今日まで歩んでこられた歴史の重みを感じさせるものでもあります。

本を手にするのと、どの頁からも、特殊教育に携わる先生方のきめ細かな子供への配慮と心遣いが伝わってきます。各学校では、総合的な学習の時間の研究が進められているところですが、この本全体が総合であるともいえます。ここに書かれている教育活動すべてが「生きる力」を育むために営まれていることが伺えます。そして、子供たちの社会自立を目指して、日々の教育に取り組む先生の思いと情熱と優しさが心地よく伝わってきます。

入り口である「就学指導委員会」、出口である「進路指導委員会」は、近隣の市町村にない充実した組織で、活動が進められています。また、昨年度の栄えある博報賞受賞は、特殊教育部が一丸となって教育実践に取り組んできた証ともいえましょう。

就学相談の窓口として開設された「そよかぜ相談」のそよかぜは、そよそよと吹く風、微風です。この作文集は、特殊教育部だけでなく、まさに、岡崎の教育に吹くさわやかな風です。子供一人ひとりを大切にされた特殊教育部の取り組みが、今後も多くの方の共感と支持を得て、ますます充実されることを願っています。

平成十三年七月吉日

岡崎市教育委員会 教育長 藤井 孝弘

はじめに

六ツ美西部小学校 校長 渡辺 勝英

岡崎市の特殊教育を振り返ってみると、昭和三十三年に梅園小と連尺小に特殊学級が開設されたのが最初である。昭和三十七年には、岡崎市現職教育委員会特殊教育部が発足した。昭和四十年当時、特殊学級が設置されている学校は、小学校では、連尺・梅園・岡崎・美合・広幡の五校にあり、中学校では、矢作・竜海・城北の三校にあった。その後、先輩諸先生方の長年にわたる多大な御尽力のおかげにより、岡崎市の特殊教育は飛躍的に充実・発展してきた。

* 特殊学級の一年間の研究実践をまとめた「研究集録」を昭和四十五年に発行し、現在に至る。

* 岡崎市就学指導委員会（委員長は特殊教育部長）は昭和五十年、特殊学級進路指導委員会（委員長は岡崎公共職業安定所長）は昭和六十三年に発足し、現在に至る。

* 部報「かいはつ」第一号を昭和五十四年に発行し、現在に至る。

* 小中学校特殊学級合同「子どもと親の集い」運動会を昭和五十八年に開催し、現在に至る。

* 福祉読本「ふれあう心」を社会福祉協議会の委嘱で昭和六十年に編集・発行

* 特殊学級担任者文集「長い目広い目こまかな目」を昭和六十三年に発行

* 中学校特殊学級の進路指導の手引き書「進路指導事例集」を平成四年に発行

* 教育相談の窓口として「そよかぜ相談室」を平成六年に開設し、現在に至る。

（本年は、岡崎市の特殊教育部ができて四十年という節目の年にあたる。）現在岡崎市の小・中学校特殊学級は、小学校では三十一校、中学校では十六校に及び七十四学級の特殊学級が設置されるまでになった。

この度、長年にわたる市内の特殊学級担任を中心とした研究活動が認められて、昭和六十三年の岡崎市教育文化賞受賞に続き、第三十一回の博報賞を受賞することができた。博報賞は私たちに希望と喜びを与えてくれた。この博報賞を受賞した四十年目は、正に教育改革の時であり、一人ひとりのニーズを把握し、支援を行なうという新しい時代のビジョン実現への取り組みが求められている。

特殊教育部が発足してからの四十年間は、特殊教育に携わってみえる先生方が、一人ひとりの子どもたちの成長と笑顔を喜びとして、障害の実態に即したきめ細かな教育活動を、日々努力を重ねて実践して築いてきた歴史でもある。

私たちは、この記念すべき四十年目の節目に岡崎市の特殊教育の足跡と障害児と共に、歩んだ教育実践の成果を記録として残すことを計画した。この冊子が今後の岡崎市の特殊教育にいささかなりとも発展の糧となればと思っている。

この冊子が生まれたのは、私たちが常に励まし、導いてくださった教育長さんをはじめ、市当局、関係諸団体のお力も大きい。心より感謝申し上げます。

特殊教育部は、思いやりのある家庭的な雰囲気、和やかさや温かさに満ち満ちている。そんな中から、各校の担任がお互いに支え合い、語り合い、やる気を起こし、切磋琢磨して「よりよい授業を創っていきつ」とするムードが漂ってくる。

特殊教育に携わってみえる先生方が、子供たちの成長と笑顔を喜びとして、障害の実態に即したきめ細かい指導に日々努力を重ねてみえる姿に、心からの敬意と感謝を表さずにはいられません。

目次

発行に寄せて	岡崎市教育委員会	教育長	藤井 孝弘	
はじめに	六ツ美西部小学校	校長	渡辺 勝英	
「待つ」ということ	矢作北中学校	校長	柴田 隆夫	1
感じる心、パワー全開	大門小学校	糟谷 京子	岡崎市特殊教育部沿革史	1
通学団登校ができるようになったよ	矢作南小学校	遠山ヒロ子	岡崎市特殊教育部沿革史	2
日直 大好き	城南小学校	尾崎としえ	岡崎市特殊教育部沿革史	3
お金が出せた	山中小学校	清水かをり	買い物学習について	9
パソコン大好き	六ツ美西部小学校	奥平 憲	特殊学級進路指導の手引きCD化	11
ひまわりしんぶん	矢作北小学校	常松 紀子	新聞コンクール入賞	13
蒸しパン作り	緑丘小学校	野澤尊・山本琴子	博報賞受賞について	15
ゆっくりと流れる時間	矢作北中学校	板倉 直子	作業学習についてのアンケート	17
価値ある失敗	六ツ美中学校	鈴木 洋美	作業学習についてのアンケート	19
これなあに	竜美丘小学校	濱井美由紀	担当者作文集「長い目 広い目 こまかな目」について	21
久しぶりの授業	美川中学校	木河 淳治	作業学習についてのアンケート	23
漢字釣りゲーム	東海中学校	宇野 美厚	作業学習について(2)・・・グラフ	25
四季のおくりもの	岡崎小学校	山本久美子	生活単元アンケート	27

千円以下だよ	竜海中学校	板垣 登	生活単元学習について…グラフ	29
四季折々の草花に目をとめて	六ツ美中部小学校	坂田 稲子	「コスモスの花」	31
誕生会	矢作中学校	穴井 利江	芋掘り交流会について	33
彼が教えてくれたこと	葵 中学校	蜂須賀靖幸	学級経営アンケートより	35
すごろく大作戦	羽根小学校	天野 伸子	学級経営アンケートより	37
ひとりひとりが輝いた	羽根小学校	加藤 栄子	学級経営上の問題点(1)…グラフ	39
共に生きる仲間	三島小学校	伊藤 眞美	学級経営上の問題点(2)…グラフ	41
なかよしきょうだい	岩津小学校	深田 鈴代	教育課程作成について	43
仲間と生活する中で	北野小学校	石川裕美子	研究集録について	45
電車ごっこ	六名小学校	川口 克也	特殊学級の道徳年間計画について	47
門松を作ろう	大樹寺小学校	倉橋 幸代	「特殊学級の学習」新聞報道される	49
けやき学級の君たちへ	上地小学校	近藤 栄子	岡崎ライオンズクラブの招待「社会見学会」	51
スポーツを浴びて	本宿小学校	長谷川司吉	交流についてのアンケート	53
ぼくの場所、見つけた	矢作東小学校	日高 牧子	校内交流について…グラフ	55
給食に行つてきます	六名小学校	大島 弘子	交流についてのアンケート	57
陽に焼けた五つの顔	甲山中学校	三浦 玲奈	教科交流について…グラフ	59
三年生徒のふれあいタイム	三島小学校	稲垣 祐子	第一回子どもと親と教師の集い	61
高齢者と楽しもう	根石小学校	平野 泉	教材教具開発サークルについて	63
よろこばれる存在に	岩津中学校	篠原 正樹	進路指導の手引きについて	65
絵と文字と声と	広幡小学校	榊原 康雄	岡崎市特殊教育推進協議会について	67

今が旬！	美川中学校	田島 広嗣	学習委員会について	69
あたし勉強大好き！	井田小学校	兼松ゆかり	学級要覧について	71
おぼえたよ	竜美丘小学校	澤 幸子	福祉読本「ふれあう心」について	73
かめさんだいすき	連尺小学校	村谷 宣子	招待「映画鑑賞会」について	75
だんご虫もありも友達	広幡小学校	吉橋 祐子	交流アンケート	77
ヒメジョオンの花	男川小学校	小林 泰子	交流対象について…グラフ	79
元気なあいさつ	矢作中学校	三輪 教子	交流アンケート	81
今日もお話できるかな	矢作東小学校	山本 純子	生活全般交流について…グラフ	83
才能発見の楽しみ	新香山中学校	岩瀬 信子	手紙より	85
自立への一歩	六ツ美北部小学校	畔柳 愛美	夏期実技講習会について	87
レンジでチーン	細川小学校	石川 修	情緒障害研究サークルについて	89
共に育つ	北中学校	犬塚 順勝	指導案綴りにについて	91
清掃は一日の始まり	城北中学校	保田 眞美	研究実践について	93
特殊学級の担任になって	南中学校	塚本 緑	過去の「かいはつ」原稿より	95
ありのままでいいよ	三島小学校	岩附 恵子	通級指導教室について	97
行事に思う	美合小学校	校長 兼平 義文	………	99
生徒に学んだこと	東海中学校	森 雄一郎	ブロック研修会について	101
おかえしのおかえし	六ツ美南部小学校	栗本喜美子	ブロック交流会について	103

もちつき大会たのしいな	福岡小学校	標養子・肉登彦	追跡調査について	105
「運動会」を楽しもう	美合小学校	安藤 仁史	子どもと親の集い運動会について	107
仕事のあり方	美川中学校	山口 博正	事業所見学会について	109
笑顔と緊張	竜南中学校	大柿 峰樹	施設見学会について	111
ぼくの字が載ってるよ	六ツ美西部小学校	吉田 里美	広報誌『かいはつ』について	113
水を得た魚	井田小学校	内田 純子	就学指導委員会について	115
相談活動を通して	広幡小学校	鳥井 裕之	「そよかぜ」相談室について	117
特殊と通常のはざま	美川中学校	石丸実智代	ADHDについて	119
わたしが講師？	竜海中学校	武田 正道	自主研修会について	121
総学が始まる	広幡小学校	鈴木 明美	東海北陸地区・研究発表大会	123
すばらしい人に囲まれ	六ツ美中学校	岡田 幸夫	第39回全日本特殊研究連盟全国大会	125
ヨウコからの手紙	福岡中学校	稲垣 繁美	進路指導アンケートについて	127
三月になると	六ツ美北中学校	蜂須賀 隆	過去の「かいはつ」原稿より	129

雑感・・・生活単元学習と総合学習の発足

秦梨小学校	校長 鈴木 忍	131
-------	---------	-------	-----

特殊教育部 参考資料

参考資料を評価して

岡崎市教育委員会 指導課指導主事 小林 義孝

「待つ」ということ

矢作北中学校 校長 柴田 隆夫

「待つ」「共に育つ」「嬉しくて」「成長した」「にっこり笑顔」「輝いている」「頼もしい」「生き生き」「心を温める」「精いっぱい」「心を打たれた」「嬉しくて」「よく頑張った」「眩しい」「私には見えていなかった」「今までになく光り輝いた」「楽しさを共有した」「共に味わえた」「応援し続けたい」「感謝したい」「急がせない」「充実している」「気持ちよく過ごせる」「私が成長した」「反省させられた」

これらのほほえましい言葉は、先生方の文章でよく使われている。特殊学級担任として、教師自身が子供たちに日々教えられ、成長し、充実した生活を送ってみえる様子がよく伺える。その陰で、日々の指導では、まさに「長い目 広い目 こまかな目」で接してみえるからであろう。

「待っているから」という歌に、「そんなに急がなくても／走らなくても／大丈夫 父さんはここで待っているから／君には君の歩き方／生き方があるはずだ／大丈夫 父さんはここで待っているから／今 君にしてやれること／父さんには何も無い／ただひとつだけ／君を待っていよう」という詩がある。

「待つ」ということは相手を愛し、信じていなければできないことだが、それが自分の中にあっただろうか、親としての自分、教師としての自分のあり方を振り返らせた思いがする。

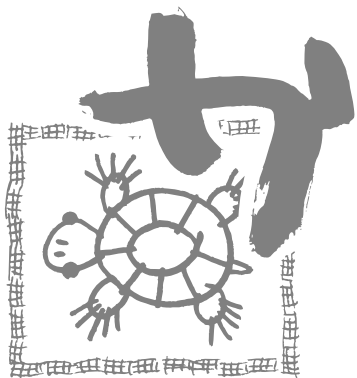
しかし、「待つ」ことの大切さは分かるが、限られた時間の中で、「待つ」ことだけでいいだろうかと心配する人もいるだろう。教師として、「何をすべきか」「何がしてあげられるか」を考え、そのための知識や技術を身に

つけたいという熱心な先生も多いのではないか。

そこで、「待つ」ということを、「すべきこと」「してあげられること」の中に入れてみることはできないだろうか。

「待つ」ということは、何もしていないというわけではない。「待つ」ということは、急がなくてもいい、君の歩き方、君の生き方でやっていこうという姿勢のことである。むしろ、相手の自発的な成長を援助するようにかかわっていくことが必要である。

「待つ」ことを続け、援助を続けて、最後には子供自身に選択させ、決定させていくことが教育に携わる者のとるべき姿なのである。



感じる心、パワー全開

大門小学校 糟谷 京子

その日の遊君は、いつもの遊君じゃなかった。ちっとも帰りの支度をしない。床に寝そべって、いつもは遊ばないプロックを出して一人遊ぶ。「かばんだよ（帰ることを意味する。）」と何度声をかけても、知らんぷり。やと動き出したけど、ゆっくりゆっくり、帰りの支度をした遊君。そういえば、あのととき、さみしそうな目をしてた。

帰りの道もゆっくりゆっくり歩く。さよならをするいつもの場所で別れてからも、ゆっくりゆっくり歩いて行く遊君。姿が見えなくなるまで見送って、帰って来た。

一人下校ができるようになった四年生の初夏のことである。家に着けば、仕事を終えて帰っているお母さんと会えるはず。もうすぐお兄ちゃんが学校から帰って来るはず。いつ

岡崎特殊教育部沿革史

1

*印は、巻末付録に、資料あり。太字は、コラムに掲載

- 昭和33年 特殊学級の開設連尺小・梅園小)
- 昭和37年 岡崎市現職教育委員会特殊教育部発足) 現在
- 昭和40年 *岡崎ライオンスクラブ招待社会見学会開催) 現在
- 昭和41年 特殊教育教育課程作成
- 昭和42年 特殊教育作品展開催) 46年
- 昭和45年 岡崎市特殊教育研究協議会発足
- 授業研究会) 60年
- *研究集録) 現在
- *夏期実技講習会) 現在
- 昭和47年 『行動類型チェックリスト』作成
- 昭和50年 岡崎市就学指導委員会発足) 現在
- 部報『開発』発行) 54年
- 昭和53年 県特殊教育研究発表大会開催(岡崎商工会議所)
- 昭和54年 *部報『かいはつ』発行) 現在
- 学級要覧の発行) 平成七年
- 昭和55年 *情緒障害研究サークル発足) 62年
- 昭和56年 県教育論文入賞「買ひ物学習」実践
- 昭和57年 『子どもと親の集い』開催(野外活動)
- 昭和58年 ち子どもと親の集い運動会』開催) 現在

もならそう。でも、この日はいつもと違ったんだよね。その違いを気にしてたのは遊君の心だけだった。

お兄ちゃんが帰っても遊君は帰っていなかった。心配してみんなで捜したら、いつもと違う道で道草してた。いつも真つすぐ家に帰って行く遊君がどうして。

遊君は知っていたんだよね。帰ってもお母さんがいないことを。朝、お母さんの服装がいつもと違ったことや旅行かばんが置いてあるのを見て、ちゃんと感じていたんだよね。

家に帰ってもお母さん、いないんだってこと。だから、道草してたんだよね。

あの日の夜、旅先のお母さんと話したよ。言葉がなくても、ちゃんと分かっているってこと。思うようにならないと、お母さんにイライラをぶつけておこっているのに、お母さんがいいんだなあってこと。お兄ちゃんとお父さんがいるのに、やっぱり、お母さんがいないとだめなんだってこと。



そんなに強くしたらいたいよ。お母さん。

遊君の気持ちに気づいてあげられなかったこと、ごめんね。でも、遊君の感じる心が発見できて、とってもうれしかった。私の大切な思い出の出来事。

通学団登校ができるようになったよ

矢作南小学校 遠山 ヒロ子

毎朝、教室に入るとすぐに、

「おはようございます。今日は遅刻しないで
これたよ。」

一男君のうれしそうな声。さらに、

「通学団できた。」

と、短い言葉だが弾んだ声が続く日もある。

「すごいね。早く起きたんだ。みっちゃん

高志君も一緒だったの？」

「うん。そつだよ。」

「良かったね。偉い！偉い！」

「明日もがんばります。」

一日の始まりが次男君、里美さん、一男君
と三人の子供たちとそろってスタートできる
日は何よりもうれしい。このようなときが日
一日と増えてくるようになったのは昨年の一
月ごろからである。

岡崎特殊教育部沿革史 2

*印は、巻末付録に、資料あり。太字は、コラムに掲載

昭和59年 進路に関する個人票作成 〔現在

愛知FM教育番組『夢を織ろう』制作(葵中)

昭和60年 *福祉読本『ふれあう心』の編集

(61年4月発行)

愛知FM教育番組『輝け！子供たち』制作

(特殊教育部)

男川小学校特殊学級担任 鈴木滋先生

『奉仕功労賞』受賞

昭和61年 三教研特殊教育研究会 夏季研修会開催

(桑谷山荘)

愛知FM教育番組『こぼを育てる』制作(六名小)

『自閉症の行動チェックリスト』作成

『中学校進路指導の実態報告』のまとめ

小学校特殊学級『通知票』と『記入の手引き』作成

*自主宿泊研修会の開催(桑谷山荘)

昭和63年 *市中学校特殊学級進路指導委員会発足〔現在

*教材・教員開発サークルの発足〔現在

月報『かいはつ』発行 〔現在

*自主宿泊研修会開催(勤労福祉会館)

岡崎教育文化賞受賞

ナイーブな感性を持つ一男君は、本学級が設置された昨年度転入してきた。欠席が多い子であったようだが、その欠席も激減。遅刻は週五回と多いものの、家族の支援を受けずに、一人でも起きて、

「ぼく、学校に行く。」

と言つて、自分で歩いて登下校をする成長を見せ始めたのが、昨年の一学期後半ごろ。それまでの登下校は、父親が送迎していたことに比べると、大きな変容を遂げつつある一男君の転入後の様子である。

さらに、それまで多かった遅刻が激減し始めたのが昨年の二月ごろ。父親の仕事が見つかり、家族全体の生活リズムが変わり始めたことがきっかけとなったように思われたが、一男君の意識の流れの中にも、自立に向けた歩みが動き始めていたように思われた。

遅刻をしないで登校し始めた。そ

れと同時に、それまで拒否反応を示していた通学団登校や一斉下校にも少し参加できるようになった。

「六男君と帰ろっかな。」

そんな言葉が聞けるようになった。人と関わる力の育ちが見られる。子供たち自身が持つ、育つ力の大きさに驚きと期待を膨らませつつ見守っていききたい。



部活を終え、下校する一男

日直 大好き

城南小学校 尾崎 としえ

一年生の奈美子さんは、いつも、彼女の交流学級である一年一組のみんなと、一緒に朝の会や帰りの会を行っていて、日直当番も他の子と同じように順番にさせてもらっている。彼女は、そんな日直の仕事が大好きで、自分の日直当番の日が来るのを心待ちにしている。そして、日直当番の日、奈美子さんは日直バッジを胸に、もう一人の日直である隣の席の和也君と一緒にみんなの前に立ち、「今から、朝の会を始めます。」と大きな声で号令をかけていく。初めのころは、声も小さく、言葉もはつきりせず、隣の子に助けてもらうことも多かった奈美子さんだが、最近では日直の仕事にも慣れ、大きな声ではつきりと、自信を持って話すことができるようになってきている。

岡崎特殊教育部沿革史

3

*印は、巻末付録に、資料あり。太字は、コラムに掲載

平成元年 *特殊教育級担任者文集

『長い目 広い目 細かな目』発行

平成3年 *東海北陸地区特殊教育研究発表大会開催

(市民会館・竜美丘会館)

平成4年 *進路指導事例集発行

中学校特殊学級「通知票」と「記入の手引き」作成

平成6年 *教育相談『そよかぜ相談室』開設、現在

教材・教具『硬貨シール』開発

平成10年 *ブロック研修会発足 現在

平成11年 進路指導の手引き改定

各中学校ごと二の事業所の見学会実施、現在

平成12年 *博報賞受賞

*進路指導の手引きCD化



「通知票記入の手引き」

また、奈美子さんは、朝の健康観察で、毎日繰り返し呼ばれる子供たちの名前を聞くうちに、学級の子供たちの名前や担任の先生の名前を覚え、言えるようになっていた。

日直の朝のスピーチは、まだ奈美子さん一人では無理なので、私がそばについて一緒に話すようにしている。テレビ型の模型からうれしそうに顔を出し、スピーチを始める奈美子さん。発音もはつきりせず、聞き取りにくい奈美子さんの発表に、子供たちは耳を傾け、一生懸命理解しようとしてくれる。そして、「おたずねはありませんか。」という問いかけに、子供たちは一斉に手を挙げ質問をしてくれる。それがまた、奈美子さんにはうれしくて仕方がない。

順番に一人ずつ名前を呼んで指名していく奈美子さん。奈美子さんに指名してもらおうと、手をピンと伸ばして挙げている子供たち。奈美子さんは、周りの子供たちのすることをよく見ていて、何でも同じようにやりたい

という気持ちを強く持っている。そして、そうした気持ちは、日直の仕事だけでなく、日常の生活や学習においても大いに見られる。交流学級の子供たちと共に生活・学習する中で、奈美子さんは多くのことを学び、成長してきた。

そして、そんな奈美子さんのことをやさしく見守り、頑張っている姿を認めてくれる交流学級の子供たちと担任の先生。いろいろな条件や環境に恵まれ、同じ学級の仲間としてこうした交流ができることをうれしく思っている。



日直のスピーチをする奈美子

お金が出せた

山中小学校 清水 かをり

チャリン。電車の中でお金を落とす音が響いた。あきこさんがお金を落とした音だった。見ると財布の口が開いていた。電車賃を「十、二十、…」と数えている間に、次の駅に着いてしまった。降りるように声をかけたので、あきこさんはあわてて降りようとして、財布からお金を落としたようだった。校外学習をにこにこ顔で出発したあきこの顔からは、いつもの笑顔は消えていた。三年前のことである。

それからは出かける前はもちろん、出かけないときも教室でお店屋さんを開いて、お金の勉強をしてきた。教師がお店屋さん、子供がお客さん。

「りんじください。」
「八十円です。」

特殊教育部コラム

買い物学習について

昭和五十五年、国際障害チャリティーの一部の援助を受け、その有効利用を主任者会で検討企画した。各学校で企画された誕生会・クリスマス会などの準備、買い物学習の補助として、使うというものであった。

話し合いは、実生活に結びつけた「買い物学習」「教室へ生活を」「教室から町へ」という特殊教育のあり方を問う機会にもなった。この話し合いは、特殊教育部での創造的授業が開花する転換期にもなった。授業公開を申し出る若い先生や交通機関を利用する展開をするところもあった。

この指導実践を特殊教育部としてまとめ、県の教育論文に応募したところ、入賞するという評価をいただいた。(巻末資料参照)

現在、その流れは脈々と続いていて、多くの特殊学級で、金銭学習を大切にしたり、生活に生きる学習指導がされている。

「十、二十、三十、四十、五十、六十、七十、八十、八十円。」

今は五十円玉を使って

「五十、六十、七十、八十、八十円。」

ということもできるようになった。

「パイナップルください。」

「三百円です。」

「百、二百、三百、三百円。」

「百円も数えられるようになった。」

あきこさんは五年生になり、クラス一番のお姉さんである。お金の学習をして、電車とバスで出かけることにした。バスに乗って早速お金の用意をしなければならぬ。

「八十円用意して。」

教師はあきこさんに言葉をかけただけで、二年生の子の世話をした。その後あきこさんを見ると、静かに前を向いて座っている。さっき言った言葉を聞いていなかったんだと思い、

「あきこさん、八十円用意するんだよ。」

「もう 用意したよ。」

につこり笑顔で返事をした。グーにした手を開かせると、八十円をしっかりと握り締めていた。教師が見ていない間に準備できたことに驚いた。この三年間の成長ぶりにはとす思いであった。バスを降りた後、笑顔を見せるあきこさんがいつもより頼もしく見えた。



電車を見るあきこたち

授業の中で

パソコン大好き

六ツ美西部小学校 奥平 憲

教室に入るなり、

「先生、パソコンある。」

「パソコンは、いつ。」

「今日はないよ。今度ね。」

毎日交わす会話の始めがこの言葉である。子供たちは、パソコンを使つての授業をいつも待ち遠しくてたまらないのである。子供たちにとって、パソコンは難しいものと考えていたが、とんでもない。パソコンを使つての授業を一番楽しみにしている。

パソコンを使つての授業は、生活単元、算数や社会の授業などで行っている。

毎週あるパソコンの授業は、パソコンの基本的な操作の勉強のために、キッドピクスを使いながらお絵かきをしている。マウスを使つてフリーハンドでピカチュウを描く子供、

特殊教育部コラム

特殊学級

進路指導の手引きCD化

平成四年、進路指導委員会で、事例集を発行した。平成十三年三月、その手引きの部分を大幅に改訂し、CD化した。資料収集を各中学校特殊学級主任に分担し、六北中蜂須賀を中心に、美川中の田島・山口、竜南中の大柿で、CDに焼く作業をした。

これにより、A4判サイズの資料、百五十枚が、自由に閲覧、印刷できるようになった。情報不足による学校格差の解消のため、特殊学級初任担当者へのフォローをも目的にしている。



進路指導の手引き

図形のキッドを使っていろいろな形や絵を組み合わせながら絵を描く子供。子供たちは、描いては消し描いては消しと、自分の思い通りの絵ができるまでパソコンを操作している。最後に自分の名前を入れて完成である。絵が出来上がると印刷を行う。一時間で全員が印刷まで行って授業を終える。パソコンの操作をしている子供たちの姿は、真剣そのもの。画面に集中し、席を立つてうろうろする子供は一人もいない。操作の分からないときは、お互いに聞き合っている。低学年の子供たちも、自分でプログラムを立ち上げ、終了まで一人で行うことができるようになった。

パソコンの好きな子供たちは、母の日、父の日のカードやお礼の手紙も、簡単な文章と絵を入れてパソコンで作って贈っている。交流学級の子供たちを七夕会に招待するときも、「先生、招待状はパソコンで作ろうね。」

と、言ってくる。招待状作りでは、日時、場所、内容を入れて、自分で作った絵を盛り込

んで完成。できた招待状を持って、それぞれの交流学級に出かけて行く。

高学年の子供たちは、社会科の歴史をインターネットを使って調べることも行っている。

「今日、パソコンやるよ。」

その一言で、子供たちは、にこっと嬉しそうな顔をする。その顔は、とても輝いている。



楽しくパソコンを操作する拓也

授業の中で

ひまわりしんぶん

矢作北小学校 常松 紀子

「パソコン室に行くよ。」

アキラ君とマサオ君は、大喜びで廊下に出る。

「手をあらわなくっちゃ。」

とマサオ君。パソコン室に行くときは手を洗うことが身に付いてきた。パソコン室に着くと決まったパソコンの前に座る。

「今日は運動会のひまわりしんぶんだよね。」

二日前に行われた子供と親の集い運動会のひまわりしんぶん作りを始めた。

ひまわりしんぶんは、本学級の子供たちが作る自分の新聞だ。体験したことを人に伝えることが苦手であるが、自分の体験をみんなに知らせるために作っている新聞である。パソコンを使い、キーボードで文字を打ち込み、写真を入れて作る。

文は、行事などがあつたときに書いた絵日

特殊教育部コラム

新聞コンクール入賞

平成七年度	東海日日新聞 第十五回学級新聞コンクール 特別賞	美川中学 七組
平成八年度	東海日日新聞 第十六回学級新聞コンクール 小学校の部 入選	広幡小 六年五組
平成九年度	東海日日新聞 第十七回学級新聞コンクール 東海日日新聞社賞	矢作北中 十一組
平成十年度	東海日日新聞 第十八回学級新聞コンクール 特別賞	美川中
平成十一年度	東海日日新聞第十九回学級新聞コンクール 特別賞・豊橋市教育長賞	美川中 六組
平成十二年度	第五十回全国PTA新聞コンクール 学級新聞の部 奨励賞	美川中 六組
	東海日日新聞学級新聞コンクール 印刷新聞の部 金賞	美川中 六組

記の文をパソコンに打ち込んでいく。はじめのうちにはキーボードで文字を入れるのにとても時間がかかり、かんしゃくを起こしていたが、今はだいぶ速くなってきた。子供たちは、私がデジカメで撮った、フロッピーに入っている写真を選ぶことができるようになってきた。

「先生、ばく一枚目打てたよ。アキラ君とどっちが早い？」

マサオ君は、アキラ君にライバル意識を持ってパソコンに向かっている。アキラ君は、そんなことはお構いなしに黙々と打ち込んでいく。

「アキラ君の方がちょっと早いかな。でも、マサオ君もがんばっているね。」

ひまわりしんぶんの原稿が出来上がると印刷をする。二人ともプリンターをのぞき込んで出てくるのを待っている。

「あ、出てきた。アキラ君のだ。」
アキラ君は、うれしそうに「こ」にしている。

「先生行ってきまーす。」

印刷できたひまわりしんぶんを職員室に持って行く。はじめは行くのをいやがったが、今では自分から持っていくことができるようになった。

「子供と親の集い運動会でがんばったんだね。」

先生方にほめられ大喜びで帰って来る。

話をするのが苦手な子供たちだが、自分の経験を知ってもらい、ほめられる良い機会である。



マサオ君のひまわり新聞

授業の中で

蒸しパン作り

緑丘小学校

野澤 裕子

山本 繁子

「今度の授業参観は、おうちの人と一緒に
おかし作りをしようか。」

「ほんと、おかし作るの、うれしい。」

「何を作るの。ぼく、できないよ。」

すぐ反応してくれる孝君と雄君。ぱつと顔が
輝いた大君と正君。笑顔になつた香ちゃん。

話し合い

みどり学級の小さなビニル袋畑で作つたさ
つま芋を使って、むしパンを作ることになつ
た。お芋のほかに、りんご、レーズン、あず
きも入れてみることにした。一年生は、バナ
ナソー。だれがどの蒸しパンを作るか、だ
れが何を買うかも決めた。

買い物

グリーンヒルへ元気よく出発。一年生の二

特殊教育部コラム

博報賞受賞について

平成十二年十一月、岡崎市現職教育委員会
特殊教育部が第三十一回博報賞を受賞しまし
た。

この賞は、財団法人博報児童教育振興会か
ら、小・中学校における「国語教育・日本語
教育」「伝統文化教育」「国際理解教育」「特
殊教育」の四部門で、すぐれた研究と実践を
した団体・個人に送られるものです。

特殊教育部の長年にわたる教育活動に大き
な評価をいただきました。



人はお留守番。お店に到着。さあ、買い物だ。

「たまごは、だれが買うの。」

「ホットケーキミックスは、ぼくだよ。」

「りんごとバナナは、ぼく。」

そんな会話をしながらどんどん探し出し、かごの中に入れていく。なかなか手際がいいよ。でも、ペットボトルのりんごジュースが見つからない。先生は、果汁百パーセントのパックジュースを手にとってかごの中へ。

「これでいいじゃない。」

「だめ、ペットボトルじゃなくちゃあ。」

と、主張する雄君。でもしかたなくレジへ。

「先生、ここにある。」

と、最後にペットボトルを見つけ出し、そつと教えてくれる正君。取り替えてもらって買い物終了。

「千五百六十七円です。」

芋掘り

ビニル袋畑へ行って芋掘り。ちゃんとお芋はできているのか、とても心配。雄君と大君

は、土をどんどん外へ出していく。みんなが見つめる。

「あつ、あつた。」

よかつた。これで材料は完ぺき。

蒸しパン作り

おうちの

人たちも一年生も張り切った。バナナの皮むきに集中する弓ちゃん。バナナを切る手つきがすばらしい香ちゃん。



みんなで芋掘り

出来上がったバナナソテーを一人で盛りつける大君。おうちの人やお客さんには、まっ茶も出して、「いただきます。」むしパンもバナナソテーもおいしかった。

ゆっくりと流れる時間

矢作北中学校 板倉 直子

四月から作業学習で、押し花作品、鉛筆立て、クリスマスリース、しめ縄、と数々の作品を作ってきた。これを学校で行われるバザーで売るということを目標にして、ていねいに仕上げるよう心掛けてきた。

毎日忘れずに水をやり、大切に育てた花を押し花にした。それを文鎮やファイル、筆箱にはり、押し花作品を作った。

新聞を巻いてリースを作り、それに色づけした松ぼっくりを付けたり、木の実を付けたりして飾った。クリスマスリースの出来上がりである。

時には、私が出してやってしまったはずがはやいと思い、やり出すと、

「私にやらせて。」

と、有子さんが言うてくる。そつだ、焦って

特殊教育部コラム

作業学習についてのアンケート

平成十二年度末、特殊学級担任にアンケートを行った。このアンケートの問いに「いい点があり」、「作業的な指導をしているか」という問いか「作業学習を時間割に取り込んでいるか」という問いの区別がなく、小学校で作業学習内容に回答があった場合、作業的な内容をしていると読み取りをした。

作業学習の内容に多くの回答があったのは、栽培と調理である。パソコンを使った作業的な内容もかなりある。また、回答が多くの項目に散らばっているのは、学級独自の作業内容が確立しているものと思われる。

作業学習は、生活単元学習とともに、教科領域を合わせた指導の一つである。「生きる力」を育むために、子供に合った作業内容をどのように提供するか、苦心の跡がうかがえる。

はいけない。この子たちの力を信じ、伸ばしてやらなくては、そのためには時間をかけなくては。分かっているはずのことだが、つい時間に追われ、焦って手を出してしまっている。この子たちは、私に自分たちでできるからやらせてほしい。でも時間がかかるから、先生待っていてね。ゆっくり時間をかけさせてねと、訴えているのだ。

バザー当日、靖子さんは張り切っていた。店の準備から、作品並べ、呼び込みと。そして大きな声で、

「わたしたちが一生懸命に作った作品です。買ってください。」と言えた。

去年は、品物を渡すのがやっとだった靖子さんだが、確実に一年の間に成長している。

「クリスマスリースです。見てください。」

有子さんも一生懸命に声をかけている。自分たちの手で作った作品を、どうやって作ったか説明しながら、お客さんと話をしている。私が声を出す必要はどこにもなかった。自分

たちの力ですべて売り切った。
ゆっくりでいい。ゆっくり時間が流れていけばいい。そうすれば君たちは、力を出し切ることができる。伸びていける。



一生懸命に作った作品を売る生徒

授業の中で

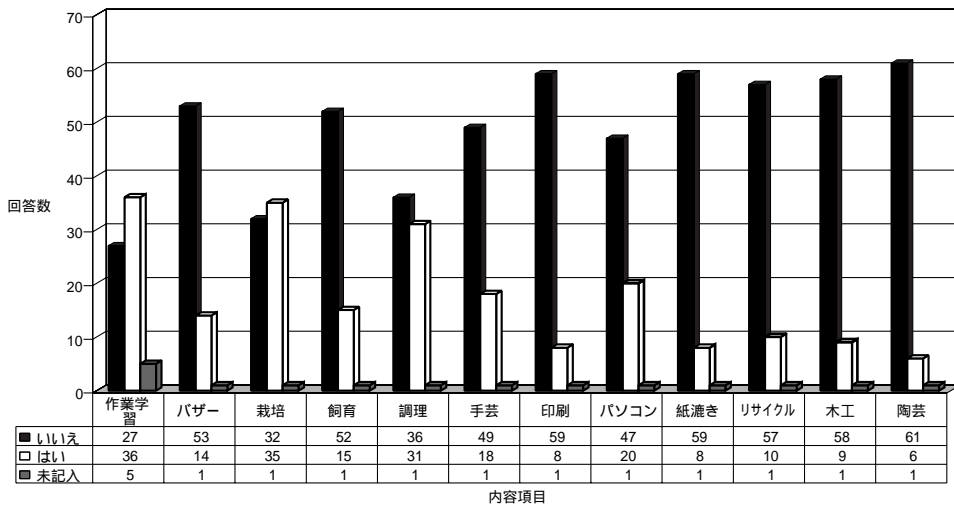
価値ある失敗

六ツ美中学校 鈴木 洋美

初めて特殊学級の担任となった昨年度の四月。一年生三名（男二名、女一名）、三年生一名（女）と共に、新たな気持ちで私の一年がスタートしたが、不安も大きかった。子供たちを目の前にし、どのように接したらよいのか分からず、思い悩んだこともしばしば。こんなことでやっていけるのだろうか、自信を失ったこともある。個性派ぞろいの我がクラス。

その一人、いつも元気よく大きな声であいさつできる翔君。言葉遣いもよく、まじめで正義感も強い。しかし、慎重派で、家にかかっていた電話に出ようとしない。そこには、悪徳業者や勧誘・いたずら電話だったらと考えると出られない（母親がそういう主義）家庭環境があった。そんな翔君と、教室で電話の

作業学習について（１）



応対の勉強をした。もともと礼儀正しい彼は、上手にこなす。しつこい業者に対しての応対の仕方でも想定して練習した。完璧だ。これならいつでも出られる。今度からは出ることを約束したので、あるとき抜き打ちで家に電話をかけてみた。が、出ない。がっかりである。次の日聞いてみる。「変な電話かと思って。」自信をつけさせるため何度も何度も電話の練習をした。

そんな時、本当に電話をしなければならぬ日があった。「明日、国語の用意を持ってきてください。」学級連絡網である。が、やはり出ない。当然、次の国語の授業で用具がないのは彼一人だけ。一時間、肩身の狭い思いで過ごすこととなったのは仕方ない。苦しい一時間、しかし意味ある一時間。何度言っても出られなかった電話に、これ以後、なんと翔君は出られるようになった！ この苦しい体験こそが、何よりも価値があったのだ。

二年目になり、大きく成長した子供たちに

驚かされる。はじめ、私が悩んでいたのは何だったんだ？子供は一年でこんなにも変わるなんて。私自身はどうだろうか…。人は皆、悩んでつまずいて、大きくなる。私も彼らと一緒に、少しずつ成長できたらと思っのである。価値ある失敗を恐れずに。



版画「もちつき」

「これなあに」

竜美丘小学校 濱井 美由紀

鉄平くんは絵カードが好きで、いろいろな果物の名前を覚ええました。その頃のお絵かき帳は、果物がいっぱいおいしそうに並んでいて、なかでも、モモとメロンはたくさん登場していました。鉄平くんとの絵カード学習は、私にとっても楽しい時間。鉄平くんは、私の口の動きを見ながら、一生懸命声を出していました。

九月に「子どもと親の集い運動会」の絵を描きました。画用紙の真ん中にプラカードを持った子供、その横に、並んで行進する子供を描いた鉄平くん。あれれ、体操服で行進したはずなのに、子供たちの体は、ひとりは桃色、もうひとりは緑色です。

「鉄平くん、これなあに？」
桃色の体を指さして聞いてみた。

特殊教育部コラム

担当者作文集

「長い目 広い目 こまかな目」について

平成元年、岡崎教育文化賞を受賞した記念に、特殊学級担当者の作文集を発行した。

これは、受賞当時の特殊学級担当者の思いをつづつたものである。長い目で、子供の成長を見つめ、広い視野で、子供の将来をみつめ、繊細に子供の変化や反応を捉える。教育に携わる教育現場の様子がかかっている。



「オ・オ。(もも)」

緑色の体を示して、

「これは？」

「エ・オ・ン。(メロン)」

「じゃあ、これはだあれ？」

プラカードを持っている子どもの顔を指さして聞いてみた。

「イ・オ・ウ・ン。(ひろく)」

「これは？」

「エッ・エ・イ。(てっぺい)」

そうか、大好きなももとメロンが裕之くんと鉄平くんの体に変身したんだね。

その後、校内水泳大会の絵を描くと、あら、今度は足の色が桃色と緑色です。

「鉄平くん、これなあに？」

「オ・オ。(もも)」

「これは？」

「エ・オ・ン。(メロン)」

「じゃあ、これはだあれ？」

足が桃色の子どもを指さして聞いた。

「イ・オ・ウ・ン。(ひろく)」

「これは？」

「エッ・エ・イ。(てっぺい)」

やっぱり変身したんだ。おもしろいね。

最近、ピカチュウがお気に入りの鉄平くん。ももとメロンが消えて、ちょっぴり淋しいな。



校内水泳大会

久しぶりの授業

美川中学校 木河 淳治

久しぶりに特殊学級の担当者に戻ってきた。五年間、自分のわがままを聞いてもらい、通常の学級担任の仕事をもらった。違う立場の仕事が、特殊学級の指導に生かすことができるのではないかと考えたからである。

九年間も勤務した矢作北中から転勤して美川中に赴任した。美川中の特殊学級（六組）は、三学級もあり生徒数も二十名を越える。これまでの自分がやってきた本当に少人数の特殊学級の様子とは随分と違ったものだった。また今年は教科の関係もあり、通常の学級の社会科が主な仕事になった。六組の授業で中心となって担当するのは社会科だけという、これもまた今までにはない形でのスタートとなった。

特殊教育部コラム

作業学習についてのアンケート

作業による製品作品の項目では、栽培による野菜・花の項目が一番多い。続いて、クリスマス関係の作品も多い。調理の内容では、クッキーが多く、季節に合わせたものや子供の実態に合わせたものを取り上げようという教師の思いが推察される。

名刺や写真たて、カレンダー、鉛筆立て、陶器といった作品もある。作業学習による製品化は、プレゼントといったことに使える。しかし、製品の製作において、販売までという見通しを子供たちに持たせることも大きな指導の目標である。全市的な取り組みで、バザーを開くことを今後の検討課題としていきたい。

六組の社会科の授業は、生徒たちがどれほど学習の積み重ねがあるのか手探りの状態でスタートした。二年生の翔君は、鋭い観察眼を持っている。例えば中部地方の掛け地図を見て、「鉄道は高い山々を避ける形で東海地方から北陸地方に向かっていて」と着地点の良し発言をする。だから君に、いろいろな答えを期待する。同じく二年生の和夫君は、歴史博士だ。これまでの復習などで重要語句の確認などをするときに活躍してくれる。二年生の健君は、あまり挙手はしないが、授業に対する集中力は高く、板書以外のメモなども進んで取っている。また三年生の真二君は、授業が騒がしくなりそうな時に、声を出している友達に注意してくれる頼もしい存在である。三年生のウイリアム君はブラジルから来て三年目である。日本語の習得に大変意欲的である。だから社会の授業では漢字はすべてふりがな付きになる。どんな授業にしようかと考えるのがけっこう楽しい。

今年とは通常の学級の社会科もやっているで、共通の教材で六組の授業もやってみようと考えた。現在は明治時代以降の日本の海外進出について学習している。通常の学級で教材とした何枚もの歴史地図を使っている。色塗り作業も取り入れているので、生徒も授業に集中して参加できている。



健の色紙絵（春）

授業の中で

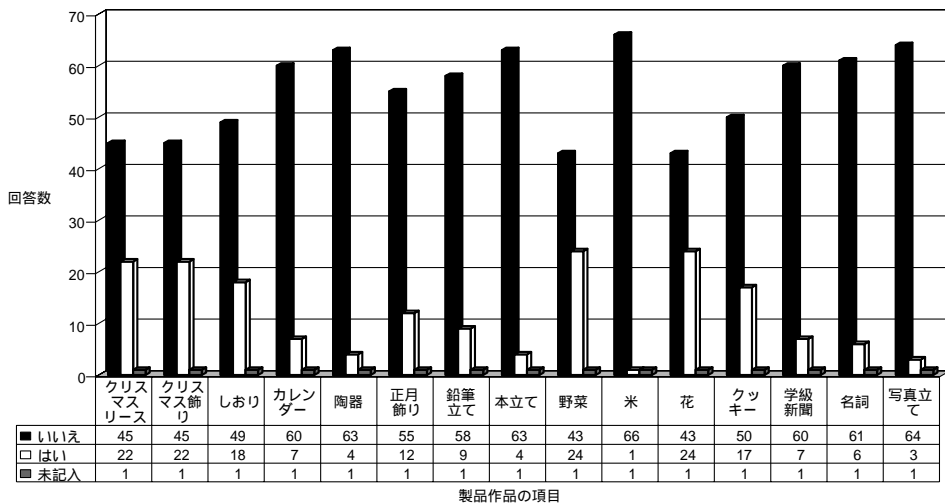
漢字釣りゲーム

東海中学校 宇野 美厚

お互い初めて見る顔。希望や緊張、喜びと不安、いろんな思いで、いっぱいだった入学・始業式に、このクラスがスタートして二か月が過ぎた。みんな、随分クラスにも慣れ、だれも一言も話さないでシーンとしていた給食の時間がうそみたいに明るくなった。時には、けんかだつてするようになった。

このクラスで国語を教えるようになって二か月。何を教えたらいいのか、どんな授業をすればいいのか、試行錯誤の毎日だった。そんな中、この子たちが学校を卒業して社会に出たとき、何が必要だろうかと考えた。毎日、目にする漢字の読み書きって大切だよなって。でも、漢字の勉強って言うと、「難しいから嫌だ。」とか、「面倒くさいから、嫌い。」って言う子が多い。まだ漢字の勉強をしたこと

作業学習について(2)



がない子だっている。そんなクラスのみんなが協力して、楽しみながら漢字の勉強を進めることができないだろうか。そこで、それぞれが勉強した漢字を書いた魚を釣って、チーム対抗で競う「漢字釣りゲーム」を思いついた。

指導員訪問の日。

「今日はチーム対抗『漢字釣り大会』をやります。」

その声で授業が始まった。教室には、みんなで作った大きな池が三つある。その中に、自分たちで作った魚を泳がせた。二人ずつペアになって、

「あっ、もう少し右。」

お互いに応援し、励まし合いながら、一本のさおで協力して魚を釣っていった。みんなの顔は、真剣そのものだった。「漢字かるた」を作って覚えた絵文字に合う漢字。連絡帳で使う漢字。修学旅行で覚えた東京の駅の名前。次々に釣った魚を黒板に貼っていく。優勝は

金メダル。準優勝は銀メダル。三位は「がんばったで賞」の賞状。みんなとってもうれしそうに受け取った。

この日、みんなの顔は本当に生き生きとして輝いていた。このとき思った。机にむかってばかりの授業じゃだめなんだって。



協力して魚を釣る隼人と真二

四季のおくりもの

岡崎小学校 山本 久美子

春は学級園で取れたイチゴでジャム作り。なべの中にイチゴと砂糖を入れて火にかけ。しばらくすると、甘い香りが漂い、イチゴジャムが完成した。あまりのおいしさに畑の先生を電話でお呼びしての楽しい試食会。

「おいしいね。このジャムを食べると、ぼく元気がもりもり出てくるよ。」と、太郎君はスプーンで何度もジャムをおかわりした。

夏。太陽の光をあびて、おいしそうに育ったトマトやキュウリ、トウモロコシ、ナスなど。畑の先生から、畑の作り方、肥料や水のやり方、鳥に食べられないように網をはること、トマトやナスの花に薬をつけ、途中で落ちないようにすることなど、野菜作りを通してたくさんのお話を学んだ子供たち。夏休み中も毎日、義路川の水をバケツでくみ、畑の

特殊教育部コラム

生活単元アンケート

平成十二年度末、特殊教育部の担任にアンケートを行った。生活単元学習の内容を問うものである。回答数の多かったものをあげる。栽培・クリスマス会・社会見学・交流準備・観察・収穫祭・行事準備・お楽しみ会・飼育・七夕である。

多くの学級で、学級菜園を持っていて、野菜などの収穫をし、それを調理して楽しむ姿が浮かぶ。また、学年行事などの交流に参加する場合、学級のほうで時間をかけ指導していることもわかる。また、季節単元「七夕」、「クリスマス会」も多くの学級で定着している。

逆に、回答の少なかった内容に、学級新聞、餅つきがある。子供の実態と合わせて内容を考えるとき、指導する内容として難しさがあられると思われる。

野菜に水をたっぷりやってくださったことを後で知り、野菜も子供たちも毎日大切に育てなければ成長していかないことを教えていただいた。

秋になると、校庭の隅の柿の木に柿がたわわに実った。今年も干し柿作りに挑戦。

「はつえさん。木から落ちないですよ。もつそ
のくらいでいいから、早く下りて来てよ。」
はだしで細い柿の木に登り、下から見上げる
子供たちのエプロンの中に、「ほうい。」と言
って投げ入れてくれる、頼もしい畑の先生。
教室の窓には、たこ糸につながった柿の実が
ずらりと並び、太陽の光を受けてとても美し
い。日ごとに色を変え、甘く変身していく柿
をながめ、味見をする子供たちの笑顔が忘れ
られない。

冬。冷たい土の中で、ダイコン、ニンジン、
サトイモが元気に頑張っている。畑の先生を
招待してのおでんパーティーは、一年間の感
謝の気持ちを込めて子供たちが計画し、心と

体を温めてくれる楽しい会となった。

今年度は、畑作りに詳しい地域の方を畑の先生として、学級の畑へ時々足を運んでいた。地域の人との交流は、子供たちの日々の生活を生き生きさせ、子供たちの心を明るく豊かに成長させていった。

学習の場に、地域の人や自然を取り入れ、その中で喜びや感動を味わいながら様々なことを学んでいくことこそ、この地で生きていく子供たちにとって、大きな力となっていくものと信じている。



なかよくジャム作り

授業の中で

千円以内だよ

竜海中学校 板垣 登

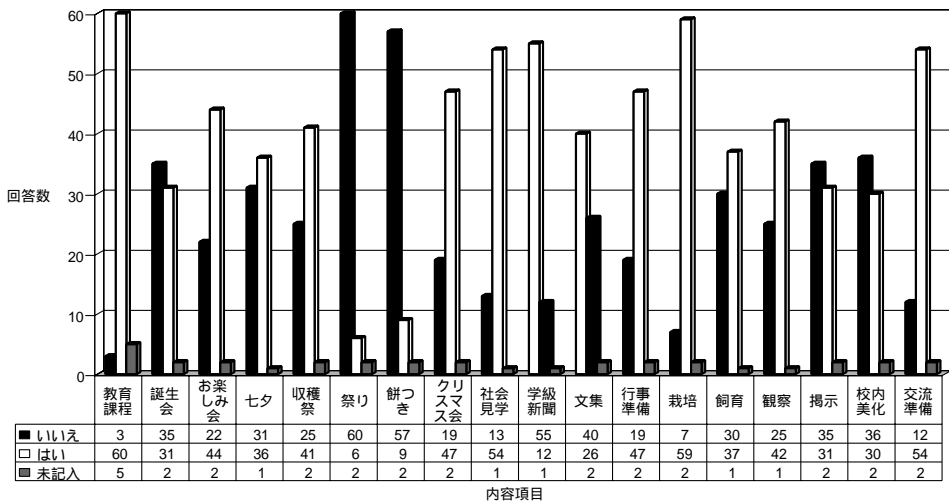
「食事代を千円より少なくしないと家に帰れないからね。」

社会見学で生徒が最も楽しみにしていたのは昼の外食であった。しかし、千円以内におさめなければ、帰りの東岡崎駅までの切符が買えなくなるという条件をつけた。昼食時に見通しを持ってお金を使うことを求めたのである。

この社会見学で生徒には二つの課題をあたえた。一人当たり三千円以内で昼を外食し、帰ってこられることと、電車に乗り込むまでは、友達と相談しないで一人で考えて行動することである。

一人で買い物をしたことがない、または、いつも千円札を出す、あるいは、電車やバスなどの公共交通機関をほとんど利用しない生

生活単元学習について



徒にとつては、決められたお金を使って電車に乗るといふことは、非常に難しい課題で、社会見学を恐れる気持ちが生徒の中に強く見られた。

そのため、事前の学習として、数学の時間を利用し、時計の読み方、時刻表の見方、乗る電車の種類、切符の料金とおつりの計算、駅構内図や看板の見方など自作のプリントを用意して、繰り返し問題に取り組んだ。

また、インターネットを使って名鉄のホームページなどから、見学地である名古屋城と名古屋港水族館までの細かな日程の計画、運賃、入場料などの経費の見積もりを生徒と共に立て実施した。

お金を使う機会は昼食とおやつの一回で、その都度、千円を強調した結果、あき子は昼食では四百円も使っていないのに、帰りの切符が心配で、おやつジュースを買うことが出来なかった。反対に、雪絵は昼食で八百円以上使いながら、おやつでは目の前のジュース

に心奪われて、残金の計算をすることなく買い求めた。しかし、あとになって帰れるかどうか心配で、ガツクリと落ち込んでしまった。

結局、全員が無事に帰りの切符を買うことができ、どの生徒も「おおよそ」の感覚ではあるが、千円を意識して買い物をする事ができた。次の課題として、帰りの電車賃がいくらだから、あと何円使ってもよいのだというような思考ができるようにしたいと思う。



スイッチを押し間違えるなよ生江

四季折々の草花に目をとめて

六ツ美中部小学校 坂田 稲子

校庭に咲く四季折々の草花や木々に目をとめて、子供の素直な心を引き出すことができたらと、詩画を始めました。

子供たちと春を探しに行きました。オオイヌノフグリを見つけて絵を描きました。

「オオイヌノフグリにお話してごらん。」

広志君は咲いている花に顔をくっつけて、

「オオイヌノフグリさん、花の色が青だね。」

「そうだね青いね。花の色が青で何みたい。」

「ブローチみたい。」

「それいいね。オオイヌノフグリさん、花の色が青でブローチみたい。できたね、これ

でいい。」

「いい。」

顔を合わせてにつこり。広志君の母親に聞くと、青いブローチを持っていました。

コスモスの花

南中 二年

コンクリート コンクリート

コンクリートのすき間で

コスモスが咲いている

とてもさびしそうだ

まわりは固いコンクリートだ

冷たい風

友達はどこへ行ったのか

コスモスの花はひとりぼっち

小さなすき間をはって

一生懸命咲いている

力いっぱい咲いている

「かいはつ」第三号

昭和五十五年十二月一日発行

子供の作品より

夏、今度はネジバナを見つけました。

「じい」のところ、どうなってる。」

らせんのようになっているところを注目するように促しました。純子さんは摘んだ花を回しながら目で追っていききました。出てきた言葉が、

「ネジバナちゃん、くりんくりん。」

私もまねしてやってみました。

「ほんとにくりんくりん。じゃ、ネジバナちゃん、くりんくりんの次を言ってみて。」

純子さんはもう一度、回しながら、

「ダンスみたいに踊ってる。」

こうして、『ネジバナちゃん、くりんくりんで、ダンスみたいにおどってる』の詩ができました。

花を水彩で描き、色を置き、空間には墨で詩を添えました。詩や書、絵から子供たちの素朴なそのままの心が伝わってくると思います。

こうしてできた作品は、季節に合わせて校

内の掲示板にはり、全校の子供たちの目に触れるようにしました。さらに、クラス展として六ツ美市民センターに飾り、地域の人にも見ていただきました。

季節ごとに身近な草花を見つけていたら気付いてみると一人四十枚になりました。それを四季の詩の絵本にまとめてみました。

子供が

自分の足

で歩き、

自分の心

で感じ、

自分で表

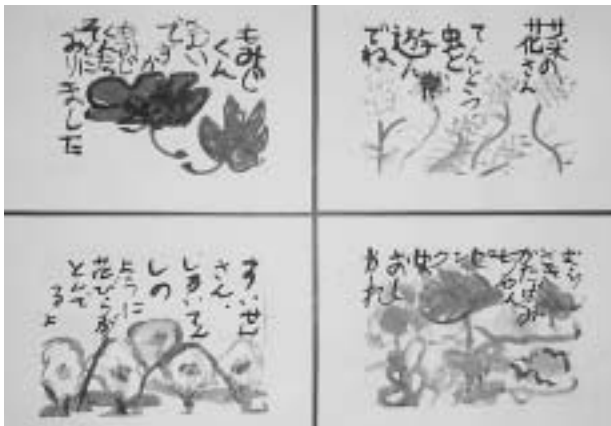
現する授

業を子供

たちと楽

しんでい

ます。



四季の詩

誕生会

矢作中学校 六井 利江

五月、貴子さんの誕生会を開いた。かつて派手な誕生会が盛んだったころ、私はそれに疑問を持ち「誕生日は子供が小さなお姫様、お殿様のように皆にチャホヤされてプレゼントを貰う日なんだろうか。」と母親の見栄の張り合いの場のようにもあつた誕生会を、苦々しく思っていた。それをなぜ企画したかというところ、「私なんかいなくなればいいんだね。」と祖父母をよく言わない貴子さんの言葉を、哀しく感じていたから。両親は離婚・母は入院。彼女の心は荒んで、人とのいさかいが絶えない。「誕生日って何だろう。」「どうしておめでとうなんだろう。」「子供たちに問う。『この世に生まれておめでとう、この歳まで生きてこられておめでとう』という意味があるのではないかと話す。今はたった

特殊教育部コラム

芋掘り交流会について

平成七年より、岡崎の野外活動施設「少年自然の家」の農場で、職員の方が丹精こめて作ったサツマイモの収穫をする交流会が行われている。

市中心部から離れて、自然の中で、秋を見つめる楽しい交流会になっている。どんぐりやくり、色鮮やかな落ち葉、アスレチック、工作室などの施設は、子供たちに充実した時間を提供してくれる。



少年自然の家、畑で

一人の自分。でも過去をさかのばれば多くの祖先、未来にも子孫。決して命は自分だけのものではないことを感じ取って欲しかった。

「感謝をしよう！今生きていることへ。今までお世話になった人々へ。」と板書し、友だちは貴子さんへのカードを作成。貴子さんは祖父母へのお礼のカード。反発する彼女に「あとどれだけの間に一緒に住めるか考えてごらん。」と促す。貴子さんのカードの文は「おばあちゃん、おじいちゃん、小さい時からありがとつ。まだまだ長く生きてください。これからが問題だから。なんとも言えないよ。一緒に頑張ろう。これからも三人くらそうね。」ケーキはみんなで手作り。

クラス四人のうち三人の誕生日会を今まで経験した。毎回、誕生日を迎える当人は家族への感謝をカードに書く。そして、家族の方からは驚きと喜びの声が寄せられる。子供たちは共同で作ったケーキを共に食べるのが楽しみ。『心の扉を開けてごらん。みんな仲間だ

よ。』これは我がクラスの級訓である。協調性はどこから生まれるか？それは人の支えによつて存在する自分に気づくこと。感謝をすることから生まれるのではと考える。この子たちの行く末に幸せあれと願いつつ、毎回誕生日会に臨む。



H4 運動会 サーフィンUSA (切り絵)

彼が教えてくれたこと

葵中学校 蜂須賀 靖幸

特殊学級の担任となって、日ごろ生徒に話していること。それは、「精一杯の姿を見せる」ということである。教えてくれたのは、クラスにいた良君であった。

自分をはじめて特殊学級の担任となった年の四月のことであった。どのように接していけば良いか分からなかった自分にどの子も明るく接してきてくれたが、その中でも冗談を交えながら、ひとときわかる話しかけてきたのが彼であった。

美術の授業のときであった。自分が画用紙に印刷してきたものをはさみで切り取って、ペーパークラフトのようなものを作る授業を行っていた。全員がどれくらいできるのか気にして見ていると、彼は左手ではさみを持って紙を切るうとしていた。

特殊教育部コラム

学級経営上のアンケートより

以下、結果の考察をする。(三十九・四十一ページグラフ参照)

「切実に感じている」項目で多いのは、「能力差」「教育課程の作成」である。特殊教育に関わるものの永遠のテーマであり、特設部設立時の学級要覧にも、この二項目は多くの担当者が記載している。

次に、問題として強く感じている項目に、「交流時の授業成立」「個別指導と全体指導のあり方」「社会性の伸長」がある。交流に出し、社会性の伸長を願うものの、学年・学級別に生徒が交流に出て行くと、学級一斉の授業ができなくなる。また、個々の能力に合わせた指導は、個別学習を進めることで一つの解決策となるが、学級全体での取り組みの良さが薄れ、いきおい学習の興味関心が薄れてくる。そんな特殊学級の実情が反映されている。

「これは左手用のはさみなんだよ。」

と、彼は明るく話してくれた。なぜ彼が左手用のはさみを使っていたかという点、右手に若干のけいれんがあり、右手での細かい作業が難しかったからである。細かい作業を必要とする内容を準備した自分を大いに反省しながら、

「ちょっと細かいけどできるかな？」

と声をかけた。正直に言って、どこまで手伝ってあげれば良いのか全く分からず戸惑っていたのだが、彼から、

「大丈夫だよ。」

という、前向きな答えが返ってきた。それから、彼の作業をずっと見ていたが、なかなか上手に、かつ楽しそうに作業を進める彼を見て、そのとき初めて特殊学級の担任になった喜びと責任を感じた。

それ以降も、彼は授業で細かい作業を要する内容に取り組んだ。ほとんど自力でやることができたが、本当に自力でできないときに

は、

「先生、手伝ってください。」

と申し出た。そんな彼の姿を、今の生徒たちにも折を見て話している。そして、こう話を付け加えている。

「自分が精一杯やっている姿をみんなに見せなさい。そうすれば、必ず応援してくれたり手助けをしてくれるよ……。」



作業学習で製作した一輪挿し

すごく大作戦

羽根小 天野 伸子

黒板のカーテンがゆっくり開く。

「わあ…。」と歓声。

子供たちの手作りである黒板いっぱい巨大
すごくの登場。緊張していた子供たちの表
情がうれしそうに変わる。次は体に負け
ないくらいの大きなさいころが出てくる。子
供たちはやる気満々である。

「行くよう。えい。」

「十。」

進んだすごくの課題は「買い物ゲーム」
である。さっそく買い物かごを持って「果物
屋」へ行くと、店では交流している老人クラ
ブのおじいさん、おばあさんの呼び込みであ
る。
「いらっしゃい。いらっしゃい。何がよろし
いですか。」

特殊教育部コラム

学級経営上のアンケートより

以下、結果の考察をする。(三十九・四十
ページグラフ参照)

また、「重い子供の交流指導」と「行事参
加」についても問題を感じている教師は多い。
特殊学級の子供が、集団活動に参加し社会性
を身につけていくことに交流の意義がある。
しかし、「集団活動に沿って行動することが
難しい子供に、どのような目標を定めどのよ
うな指導をして目標を達成していくのか」と
いう交流学习の計画を立てることは、教師に
とって大きな課題である。

「交流学級担任との情報交換」の項目に対
して、「あまり感じない」と「よく感じる」
の回答数に大きな開きのある結果となってい
る。学校により、学級により、状況が大きく
違うことを示している。

これら特殊学級担当者の抱える経営上の問
題は、子供の実態と大きく関係してくる。ま
た、その問題は特殊学級担当の経験年数とは
関係なく生じてくる場合もある。情報交換や
研究協議が、ブロック研修会などで行われ
よう、研修の場の充実が必要である。

優しそうなお店やさんだ。

「バナナの六十八円とはくさいの八十六円ください。」

「いくらになりますかね。」

と聞かれると、克也君は即座に暗算で、

「百五十四円ですね。」

と、百円一枚と十円五枚、一円四枚を財布から支払うと、お店の人もびつくり。

「克也ちゃんすごいね。よくできたね。ありがとうございます。」

克也君は満足気に笑っている。

次は、一男君がさいころを振る番である。

「一、一、えい。」

さいころの目は八と出る。

みんなの好きな「魚つりゲーム」

釣った魚に課題が隠されている。

秘密の扉からかけ算の文章題が出てきた。

このように、ゲーム遊びを通して課題を解決してきた学習は、算数の苦手な子供たちにとって楽しみながら問題を解くことができた



輪投げでがんばる克也君

ので、意欲的で生き生きとした盛り上がりのある学習となり、老人クラブの交流もいっそう深まった。

授業の中で

ひとりひとりが輝いた

羽根小学校 加藤 栄子

部屋の隅に飾った大きなクリスマスツリーは雰囲気を盛り上げる。プレゼントも手作りパンもうまくできた。準備は万端。老人クラブのおじいさん、おばあさん、そして先生たちも大勢来てくださった。

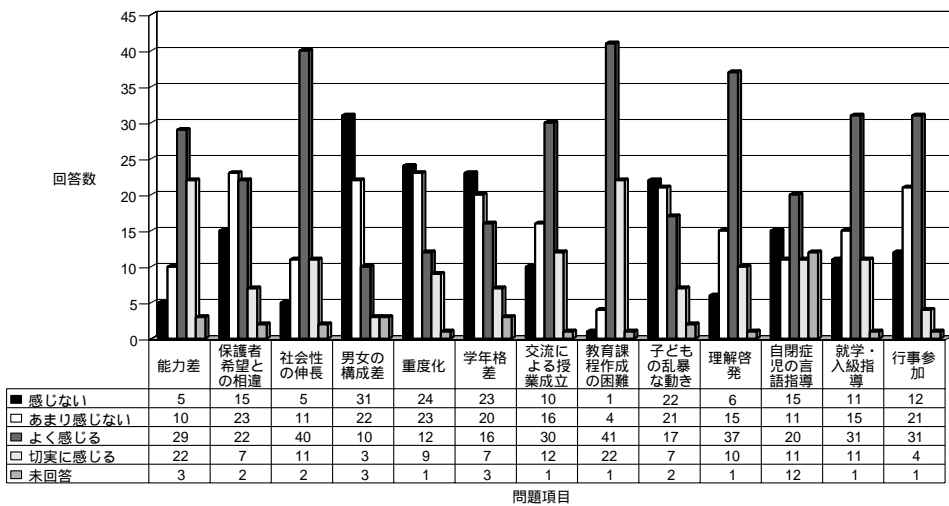
「今から、ほのぼののクリスマスパーティーを始めます。」

やや緊張きみであったが、大きな口を開けて一生懸命あいさつする卓君の姿に、「がんばるぞ」という意気込みが感じられる。

まずは、元気良く「すすめがサンバ」を歌う。何日もかかって覚えた手話も、今日はよく揃っている。歌の好きな孝君と奈美さんの目が輝いている。

司会の奈美さんも恥ずかしがらず張り切っている。

学級経営上の問題点（１）



いよいよカルタ取り。クラスの出来事や思い出をカルタにした手作りのオリジナルカルタである。

「しょうぼうしゃ のせてもらって いいきぶん」

元気良くカルタをゲットしたのは、もちろん克也君。車が大好きな克也君の一番のお気に入りのカルタであった。

「なおちゃんは みんながたよれる おねえちゃん」

照れながらも、うれしそうな奈美さんの顔。次々にカルタを取る子供たちの声が弾んでいた。

次は、英語のカードめくり。絵を見て、英語で答えるゲームである。木琴のカードを手にし、

「ザイロフォン」

と得意気に答える克也君に皆びっくり。お見事。

自分の好きなことをしているとき、子供た

ちの目は輝く。一人一人が輝いて見えたクリスマス会であった。



ほのぼのクリスマスパーティー

授業の中で

共に生きる仲間

三島小学校 伊藤 眞美

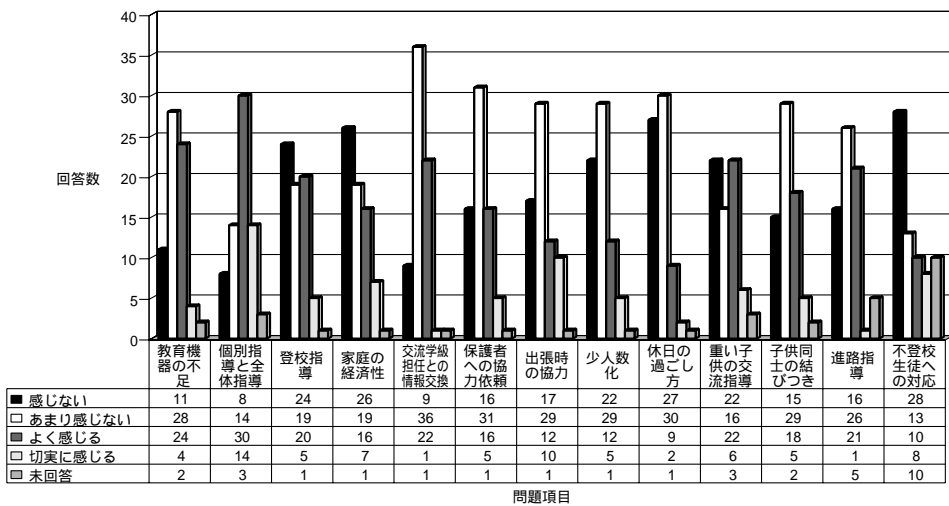
「先生、弘君、みんなと跳べたよ。」

四年生、三学期の四年一組でのなわとび大会の練習後、祐樹君が息を切らして自分のことのように喜んで報告に来てくれた。

弘君がなわとびを一人で跳ぶことができるようになったのは、四年生の十二月である。長縄に十五、六人が入って一斉に跳ぶというなわとび大会の種目は難しいのではないかと思っていた。その日から、わかば学級での猛練習が始まった。はじめは長縄で一回も跳べなかつた弘君が、毎日の練習を重ね、一回、二回と跳べるようになってきた。一か月が過ぎようとしたころ、連続で十回位跳べるようになり、みんなで大喜びした。しかし、友達と一緒に入ると続かない。

そんな時、放課時間に練習をしていると、

学級経営上の問題点（２）



四年一組の子たちが一緒に付き合ってくれるようになった。練習して二か月の頃には、友達と息を合わせて跳ぶことができるようになっていた。すごい感動であった。本人のがんばりもあつたが、周りの励ましが大きかったと実感した。また、四年一組での練習でも交流学級担任と協力して取り組めたことも大きな成果であつた。周りの子も弘君のがんばりを見て、それを認め、一緒にがんばろうという気持ちの育ち、弘君も含め、学級一丸となれた。

いよいよなわとび大会当日である。弘君の隣で孝君が手をつなぎ、「跳ぶ、跳ぶ。」と声をかけ、一緒に跳んでいる姿を見て、胸が熱くなつた。担任が声をかけたわけではなく、子供たちが自然に行っていたのである。共に力を合わせ、がんばつた瞬間である。

五年生になつて弘君は運動会の組立て体操もがんばり抜いた。なわとびの猛練習が自信となつたようだ。なわとび大会でも楽しく練

習に参加し、本番では、弘君のグループが学年で一番多く跳ぶことができた。

交流を通し、多くのことを得た。子供たち同士あたりまえに溶け込む姿、交流学級担任との連携が深まり、支援に広がりが出たこと、なんといつても互いに一緒に活動することが楽しかったこと。通常の学級の担任で交流学級担任を希望する教師が増えてきたことも嬉しい限りである。あえて交流ということを意識しなくても、自然にふれ合っている子供たちを見てみると、別個のものではない一元化した考え、インクルージョンの方向性が見えてきた気がする。共に生きる仲間なのだから。



学芸会「どんどこどん」

なかよしきょうだい

岩津小学校 深田 鈴代

ぼくたちガラガラきょうだいは

とっても なかよし三人組…

心温まる拍手の中、満面の笑みを浮かべてエンディングソングを歌う三人の姿があった。苦手とすることは「やだ!」を連発してしまいが、素直でかわいいい和男。時には世話を焼きすぎてしまうほど二人をいたわる気持ちの強いやさしい明子。そして、一番年上の新一は、感情の起伏が大きく、自分の世界に入り込んでしまうことも多いが、朗らかな人柄で周りを和やかにする力を持っている。

このように個性豊かな三人は、学級単独で取り組んだ学芸会を通して「お互いの良さを認め合い、「仲間と一緒に活動する喜び」を実感することができた。

特殊教育部コラム

教育課程作成について

昭和四十一年、特殊教育部は、特殊学級の教育実践を明確にするべく、その手がかりとなるよう特殊教育の教育課程を作成した。県教育センターによる「特殊学級（精神薄弱）教育課程案（昭和四十三年）大山康夫…当時竜海中勤務、長期研究委員として編集に参加」より、二年も早く完成している。

この教育課程は、中学校特殊学級を対象としており、教科指導、道徳、特別活動を柱に、系統性を重視したものになっている。促進的な学級を対象としており、現在の教育にそのまま取り入れることは難しいが、いかに学力の定着を図るか、特殊学級の孤立化を避けるかということに配慮がなされ、その精神は、今でも学ぶべきことが多い。

明子は次のように作文を書いている。

私たち三組は『三匹のがラガラやぎとかいぶつトルル』のげきをしました。何回も何回も練習していたら、なんだか本当の兄弟のような気持ちになれてすごくおもしろかったです。

三回目の今年は、たかお兄ちゃんがいなかったけれど、やっぱり『ガラガラやぎ』のげきをしました。たかお兄ちゃんが写真でどうしようしたときに、おきやくさんがびっくりして「わあー！」と言いました。私は、四人でげきをしているような気持ちになりました。これからも、四人でなかよく、いろんなことをしてみたいです。

明子の作文からも推測されるように、それぞれの輝きを生かした活動をすることで、お互いの意欲が増し友達を気遣いながらなかよく活動することができたと思われる。今後も、さらに「なかよしきょうだい」の和（輪）を広げることができるような支援のあ

り方を追求していきたいと考えている。

そして、ご家族と一緒にあって子供たちの成長を喜び合える関係を深めていきたい。



学芸会より

仲間と生活する中で

北野小学校 石川 裕美子

本学級は、男子二名・女子一名の計三名で構成されている。三人とも一年生である。それぞれ異なった障害がある。

子供と過ごす中で、一人一人を理解し、特に不得意なことを克服できるようにしようと考えた。

六月の下旬に研究授業をやる機会を得た。そこで、七月七日の「七夕」を取り上げ授業を設定した。

ここでは、七月七日が七夕であることを知る。七夕飾りを作る中で、切る（はさみ）・のりづけ・書くことの三つの作業の各自の上達を図るよう、目標（全体・個人）を立てた。研究授業当日は、子供たちの努力によって、授業がうまく進んだ。本当に一時間子供たちは頑張ることができた。目標もほぼ達成でき、

特殊教育部コラム

研究集録について

昭和四十五年度より、年度の終わりに一年間の研究実践を各学校ごとにまとめてきている。研究テーマに沿い、各学校・学級の実情に合わせた内容である。平成九年度より現在のサイズのA4版になった。初期の研究収録内容を見ると、「よみ、かき、そろばん」の学習の基礎を重視したものになっている。最近の集録では、教科・領域を合わせた指導、生活単元、作業学習、また、総合学習を意識した内容が多くなっている。

単なる知識の伝達から脱却し、子どもの生きる力、生活する力を重視した内容を追いつめる特殊教育部の姿が現れている。

巻末に、過去の研究集録に記載された研究主題一覧を載せた。



うれしかった。

はさみでちようちんを作る

この授業では、はさみを使い、七夕飾りのちようちんを作る作業を入れた。ちようちん作りは、折り紙に書いてある赤い線にそってはさみで切ることだった。

はさみを使う学習

このはさみの作業は三人を結び付けるものであった。なお君は、はさみを使うことが好きだった。なお君がはさみを使い出すと、よし君も良子さんもやりたがる。なお君のまねをしようとするのである。短冊のような紙をチヨキチヨキ切るだけであるが、その速さと細かさをよし君も良子さんも経験したいようであった。よし君は、はさみを持つことができなかつた。良さんは、必要以上に力を入れて、上手に切ることができなかつた。これを克服するために、はさみを使う学習として位置づけ研究授業までほとんど毎日のように学習した。

三人が同じことを一緒にやる学習であった。この学習をやることによって、三人がかわつていっているのではないかと感じられた。お互いがお互いを意識しているということである。同じことを三人一緒にやれる学習としてもよかつた。

この研究授業をやるに当たり、子供一人ひとりの得意とするものを生かし、不得意とするものを克服する学習を得るきっかけができた。こういうときに子供を伸ばすことができているのではないだろうかと感じた。



3人で作った七夕飾り

電車(ついで)

六名小学校 川口 克也

フレンド二組の子は、三輪車で遊ぶのが大好きです。放課になると、隆君(一年)と耕司君(四年)の奪い合いが始まります。それを見て花子さん(一年)が「けんか、やめて。」と声をかけます。しばらくすると、みんなバラバラになって積み木や電話などで一人遊びに興じています。だから、「三人いっしょにいても、けんかだけの接点しかないフレンド二組ってなに。」ということになるわけです。

十一月初旬、「でんしゃ(ついで)」で授業を組み立ててみました。ここでのねらいは、三人ができるだけ長い時間、いっしょに遊ぶこと、あえてけんかの場面を設け、三人が関わりあうことです。

さあ、出発進行。私が運転士になって、やり方を説明します。隆君の電車好きをねらっ

特殊教育部コラム

特殊学級の道徳年間計画について

六名小学校では、昭和五十九年道徳の研究委嘱を受けた。それに伴い、特殊学級担当者は、(兼平指導員、山西教諭、赤崎教諭、当時)は、特殊学級の道徳の年間指導計画を作成した。

この年間計画は、生活単元学習を軸に、低学年の道徳指導内容に対応させた計画である。月別に活動内容・個別のねらい・時間数・展開大要・指導上の留意点などが掲載されている。

生活単元を道徳の視点で捉え直した年間計画とも考えられる。そして、子供の発達を願うとき、全人格の発達を考慮することは必然的なことである。

また、研究テーマを学校合体の特殊教育においてその主旨を曲げることなく、取り入れていくことは難しい。この六名小特殊学級の研究は好例として挙げることができる。

ての授業ですから、隆君は大乗り気です。耕司君も、「シュツ、シュツ、ポツ、ポツ。」汽笛を響かせてくれます。心配だったのが、花子さんです。ちよつと気に入らないことがあったり、間があくと、動かなくなってしまう。それを阻止するために、音楽好きの趣向を生かし、曲「かもつれっしや」を流して活動したら、大当たりです。喜んで走り回っています。

今度は子供たちだけで活動します。早速けんかが始まりました。「だれが初めに運転士になるのか。」隆君が先頭に立ち「ぼくいちばん。」耕司君がすかさず「ううん。ぼくでしよ。」花子さんが言います。「けんか、だめ。」いつまでもこのやり取りが続ぎ、いつころに解決しません。ところが、どこで覚えたのか、解決策が提案されました。「じゃんけんできめよう。」「うん、そうしよう。」私は、自分たちで解決しようという姿勢に心を打たれ、嬉しくて声をかけずにはいられませんでした。

した。

「すばらしい。じゃんけんね。やるよ。せえの、じゃんけんぼん。」隆君はグー、耕司君はパー、花子さんはグー。「はい、だれのかち。」

「ハーン。」全員手を挙げています。

（もしかして、じゃんけんを理解していないってこと。あら、またけんかが…。奇声を発するな。

手をだす

な。ああ

あ…。）

かもつ

れっしや

は、教師

の子供理

解不足で

脱線して

しまいました

した。



じゃんけんぼんするフレンド2組

門松を作るころ

大樹寺小学校 倉橋 幸代

「雄大君、今年も門松作りをやりたい？」
「うん、やりたい。」

暮れも押し迫った十二月、わたしは雄大君にそつと尋ねました。今年で四年目の門松作りです。でも、今年は総勢四人。うち二人は一年生です。力仕事はできないし、のこぎりで切るのもつと難しいし…。どうしようかと思ひ、他の子供たちに内緒で雄大君に尋ねたのでした。そうしたら、すぐに返ってきた雄大君の力強い返事でした。

四年前より、お正月を迎える準備にはどんなことがあるのか、自分たちでできることはやってみようと始められた門松作りです。一年目は、学区に住んでみえる庭師さんを講師さんに招いて、教えていただきました。四年目になると、校内の職員でも竹の組み方、縄

特殊教育部コラム

「特殊学級の学習」新聞報道される

『特殊学級児童が校門前に門松手作り』

平成十一年十二月毎日新聞三河欄に取り上げられた新聞の見出しである。

(以下新聞の抜粋)

特殊学級の四人と担任教諭、学区の建築業小林さんらが協力して高さ二・四メートルの大門松作りに汗を流した。三年前、小林さんが「何か行事として残せるものはないか」と発案し、正月の風物である門松を作ることになったという。小林さんの指導を受けながら、児童たちは八ボタンや松、南天を植えて、立派な門松が完成した。



平成11年12月 毎日新聞より

の結び方等できる方もできました。一番たいへんな竹を斜めに切ることは、切り易くするための道具が作ってありました。校内を探してみると、材料の松・南天・梅・笹等なんとか手に入れることができます。初めて製作する一年生にも、「自分たちでやれないことを投げ出してしまうのでなく、できる人・知っている人に助けてもらうこと」によって完成させることができるのだ」ということを体験してほしくて、今年も取り組むことにしました。

門松作りに必要な竹は、大樹寺の竹藪からいただきました。

「学校の校門に門松を作ろうと思うので、竹をもらっていいですか。」

三年生の雄大君が先に立って、大樹寺の住職さんをお願いしていました。竹を斜めに切るのは、自分たちではできないけれどもどうしようかと悩んだときも、雄大君がさっさと職員室に行き、教頭先生に頼んでいました。



教頭先生の手元を見つめる雄大君

「さっき、雄大君が一人で『竹を切つてほしい』と頼みに来たよ。」
と教頭先生に言われたときには、担任二人はとても驚きました。
今年の門松は昨年までのものと比べ、一回り小振りでした。しかし、子供たちが悩み工夫し行動した結果できあがったものであることで、今までになく光り輝いた門松となりました。

けやき学級の君たちへ

上地小学校 近藤 栄子

みんなと出会ってすぐの社会見学。大好きなバスに乗って、満足そうに外を眺めていたリヨウジ君、目の前をゆったりと泳ぐ魚や亀に大喜びしていたね。そんな君の描いた絵は、心に焼き付いた亀と、亀を見ている君。おばあちゃんに、初めて人の顔を描いたと喜んでもらえたね。その次に描いた学習発表会の絵には、四人もの友達が描けてすごかったよ。

学習発表会に向けて、交流学級の友達と一緒に欠かさず練習に参加したシンゴ君、お母さんが見に来てくれた発表会当日、はつびを着てにこにこしながらうちわを振っていた姿が、鮮やかに目に焼き付いているよ。ご両親の将来を見据えた強い願いと温かい大きな愛情に支えられて、君は確実に成長していくね。出会ったころはまだ話ができなかったヒ口



平成8年社会見学作品「キリン」

特殊教育部コラム

岡崎ライオンズクラブの招待 社会見学会

昭和四十年より、岡崎ライオンズクラブのご好意により、小学校特殊学級の児童は、社会見学会に参加している。平成十二年度は、観光バス六台で、総勢二百六十八名の参加があった。名古屋港水族館を見学した。

クラスの友達と、子どもと親の集い運動会や交流で会った他校の友達と楽しく参加できる会である。(参考資料巻末にあり)

キ君、二か月ほど経ったある日、君は、突然、「空、青いな。」

と言った。驚いて見上げた空の碧いこと、私は心から、

「きれいな空だねえ。」

と言った。すると君は、

「雲、出てるね。」

と言ったね。そのとき私ははっと気付いた。いつも家でこんな風に話し掛けてもらっているんだ。君は回りの人の言葉を聞きながら、心の中の部屋に沢山の言葉を溜め続けていたんだ。だから、こうして話せたんだって。それから君は、言葉を介して人と関われるようになっていったね。この出来事から、今言葉を覚えている君たちには、聞いて嬉しくなるようなことをいっぱい話しかけてあげたり、頑張れたときはうんと褒めてあげようと強く思うようになったよ。モトキ君、山の学習に、全日程完全に参加し、助け合ったり、時には我慢したりして、よく頑張ったね。スタンツ

の「UFO」と「アイン体操」を踊る君は、完璧に学年の一員だった。あの三日間が、君に、大きな自信と人と関わりながら生きる力を与えてくれたね。

無邪気で精一杯生きている素敵な君たち、これからどんな成長を見せてくれるのか楽しみにしてるよ。



住んでみたいな 海の底

スポットを浴びて

本宿小学校 長谷川 司吉

「先生、『それから八年』だよ。」

嬉しそうに、プラカードを踊らせやってみせた。劇の一場面、自分の出番のところである。

学芸会は、交流学級に入って、四年生は劇「寿限無」を、二年生は劇「金のがちょう」を発表することになった。配役は、交流学級の先生と話し合い、子供が生かされる役にすることにした。

四年の二人は村の子供役になった。セリフは、子供たちで遊ぶときの一言。

「かくれんぼ」

年月が経ったことを知らせる一言。

「それから八年」

そして、二人とも「かごめかごめ」をして遊ぶ演技をすることになった。

しかし、練習で一人はステージに上がれな

特殊教育部コラム

交流についてのアンケート

平成十二年度末、特殊学級の担任に交流に
着いてのアンケートを行った。

行事交流については、ほぼ全学級が、学
校・学年での行事にできうる限り参加させよ
うという姿勢が見られた。

交流学級の行事へは、なるべく参加とい
う意識が見られるものの、それを許さな
い状況があるようである。

アンケートではその理由を問うものはな
かったが、次の理由が考えられる。

- ・ 交流に行った場合、残る子供の対応に人
的な余裕がない
- ・ 交流の内容と子供の実態とに開きがあ
る。
- ・ 交流により、特殊学級での指導に指導の
空白時間ができ、成果の積み上げが難し
くなる。

交流の中で

ぼくのところ、見つけた

矢作東小学校 日高 牧子

「見たか！」

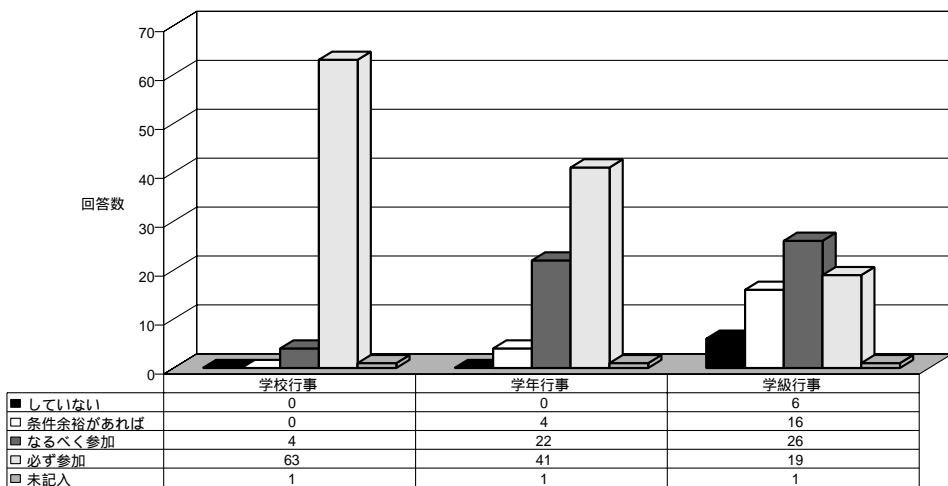
舞台の上、マイクの前に進み出て、せりふを言う。仕草のかわいらしさと精一杯演じる姿に、一声発するたびに客席から歓声がわき起こる。十一月のある日、学芸会の劇発表での一コマである。

さくらすみれ組は、毎年の学芸会に単独で出演している。四月に入学した一年生のただし君にとって、この日は初舞台だった。黒の衣装にアクセントは赤のトンがり帽子。教えられた通りに、マイクの前で元気よく話す彼を見守りながら、

(ああ、成長してきたな……。)
と感じた。

入学してしばらくは、すみれ教室の片隅のマットの上が、放課時の彼の定位置だった。

校内交流について



近くでほかの子たちが遊んでいるのだが、決してその中に入ろうとしない。ほかの子も、上手に誘ったり関わったりすることができず、たまに接触すると、ただし君は相手に唾を吐きかけた。彼もまた、ほかの子との関わり方が分からなかったのだ。今思うと、自分の居場所を探していたのだろう。マットの上から、遊んでいる子たちをじつと見ていた。

「みつくん、みつくん。」

さくらすみれの三年生に、お気に入りの友達ができだ。名前を呼びながら後を追う、彼のこととは何でもまねをした。

みつくんとの関わりは、やがてほかの子へと広がっていった。夏休みに入る少し前には、運動場でみんなと一緒に遊ぶ姿が見られるようになった。ことばも増えてきた。

「先生、このごろ家では滅多に唾をかけなくなりました。」

一学期末の個別懇談会で、ただし君のお母さんがおっしゃったとき、一学期の頃のこと



ブラックボックス、なにかな？

を思い出した。いつの間にか、彼は人に唾をかけなくなっていた。学級の中に溶けこみ気が持ちが安定してきた。笑顔がそれを物語っている。

今日も、ただし君は友達と仲良く遊んでいる。すみれ教室のマットは、お客さんをなくして久しいが、楽しそうなさくらすみれの九人を見まもり続けている。

給食に行つてきます

六名小学校 大島 弘子

「明日、五年二組の教室に給食に来てね。」
「うう、...」。

家庭科の交流学習が終わったときに、二組の梓さんと絵理奈さんから声を掛けられて、返事が言えずにいる恭子さん。「いや」と言うのは、悪いと思つてためらっているのであらう。

五年生になり、朝の会も家庭科も行事も何でも「五年二組に行つてきます。」と言つて、時間がくると一人で出かけて行きます。それでも給食の時間だけは、一緒に行こうとだれが誘つても嫌がりません。

一年生の初めから、五年間挑戦し続け、なかなか交流できなかったのが給食でした。

小学校に入学して、初めて一年の教室に行つたのが、給食でした。同じ一年生のマー君

特殊教育部コラム

交流についてのアンケート

教科交流について分析をする。

交流をしている教科で多いのは、音楽と保健体育である。他教科と比べ、かなり開きがある。続いて、図工美術、家庭技術である。技能教科に多いのは、体を使った、操作的な内容が該当教科に多いためと推察する。

国語・社会・算数数学・理科・英語でも教科交流が行われていて、情緒障害特殊学級に在籍する子供が、条件のそろつたところで、学習が行われている状況もある。

項目「その他」で、回答に関して、あくまで、今の状況であり、年度、学期で変化すると、回答を寄せられたところがあり、あくまで子供の状況や交流の内容を検討して、臨機応変な対応を教科交流でもしていくという姿勢が大切であると感じた。

と私と恭子さんとで給食を持って、一年一組に出かけて食べました。何事もなく過ぎた時間でした。翌日も、同じように給食を持って、一年生の教室に向かいました。ところが、廊下の角で曲がると、恭子さんが付いてきていないではありませんか。戻ってみると、すぐそこに給食を持ったまま下を向いてたたずんでいました。

ゆっくり歩き出しても付いてきてくれません。どうも一年生の教室に行くのがいやだったようです。

それが始まりでした。体育の学習は一緒にやっていました。でも給食は、一緒に食べられません。それならば、一年生の子に来てもらって一緒に食べようと試みました。

二年生では、特別教室をランチルームとして、三十人ほどで給食をしてみました。そこでは食べることができたのですが、二年一組の教室では食べられません。

「一人で教室に行けるよ。」と頼もしくなった四年生。本人も何とか食べようとがんばっていましたが、涙が出て食べ物がつかえてしまい、食べられません。

そんなにつらい給食交流も、平成十二年十一月八日水曜日、「榊原先生、来週の月曜日から給食きます。」

と、自分で伝えてからは月・火曜日に、五年二組で給食を食べています。

給食ならば交流は簡単だと思っていた私には、恭子さんが見えていなかったのです。



みんなでいっしょに給食

交流の中で

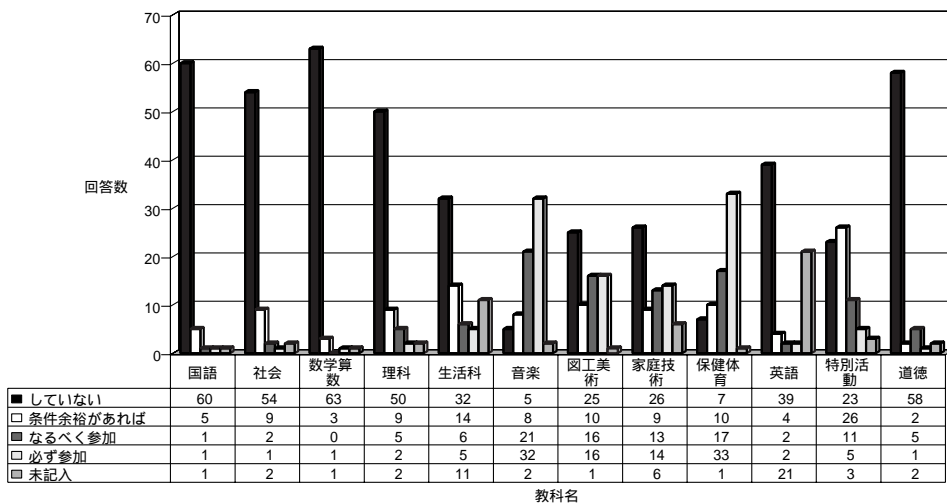
陽に焼けた五つの顔

甲山中学校 三浦 玲奈

九月とはいえ、まだ日差しが強く、残暑の続く中で、陽に焼けた五つの顔がとてもまぶしかった。特殊学級の担任として初めての学校行事「運動会」。戸惑いや自信のなさから不安でいっぱいだった。でも、とにかく「やってみよう」「この子たちの中に飛び込んで、打ち解けた雰囲気作りの中でがんばってみよう」という気持ちがふくらんできた。

三年生、三人の男子は「混成リレー」「ムカデ競走」「部活対抗リレー」と参加し、通常の学級の中でも輝いていた。とにかくクラスのために頑張ろうと応援合戦にも力を入れていた。「ムカデ競走」では転んだり失敗しながらも、通常の学級の子たちに助けられながら頑張り続け、満足感に満ちた顔をしていった。「混成リレー」では一人で走る距離を三

教科交流について



人で分けて走った。しっかりとバトンを手渡し、私は光司君と一緒に横で「ガンバレ！」「ガンバレ！」と言いながら走った。

二年生、二人の女子は全校女子の中で汗をかきながら一生懸命引つ張って参加した「綱引き」。通常学級の中で次の人に、しっかりとバトンを渡そうと必死で走った「混成リレー」。どんな種目にも真剣に参加し、一生懸命だった。

そんな五人の様子を、去年同じ教室で共に過ごした卒業生の弘司君が見に来てくれた。

五人の子ども達は「来てくれた！」「来てくれた！」と大はしゃぎをし、とてもはりきっていた。卒業しても気にかけて、見に来てくれた弘司の気持ち、私は嬉しかった。

特殊学級の担任を初めてやり、毎日五人のピュ



運動会で使った学級旗

アな心に接していくうちに、私もたくさんの事を学んだ。

全校という集団の中に参加した運動会。そして運動会に向けての毎日の練習。小さなグループだけでなく、大きな集団の中での、一人一人の様子や行動は立派なものであったと思う。いつもとはちがう、新しい彼らの表情を見ることができた。

朝方の雨も上がり、青空の中に秋の運動会は終わった。

陽に焼けた五つの笑顔が輝いて見えた。

交流の中で

三年生徒のふれあいタイム

三島小学校 稲垣 祐子

三島小学校では、交流推進研究指定校として、二年間の研究が行われました。特殊学級わかばとの交流は、三年生とのふれあいタイムを通して行われました。そのため、平成十一年度より研究会に向けて数々の研究授業を行い研究を進めてきました。

三年生とのふれあいタイムでは、わかば学級の子供が各グループに一人ずつ加わり、遊びを通してふれあいを深める交流です。そして、それぞれの学級担任がティーム・ティーチングとして、各グループに加わり活動を進めました。私は、一年の翔平君の入っているガッツチームとともに活動しました。

三年生の子供たちにとって、翔平君はかわいい弟という存在でした。けれども、翔平君は、三年生の子が好きな遊びを理解できない

特殊教育部コラム

第一回子どもと親と教師の集い

昭和五十七年七月、市の援助を受け、岡崎市小中合同特殊学級野外活動が、「子どもと親と教師の集い」として、少年自然の家で開催された。

時期に合わせた七夕集会、野外でのカレールイス作り、キャンドルセレモニーの活動をメインに、参加者のふれあい、語らいの場になった。子どもたちだけでなく、教育担当者にとって、横のつながりの深まる有意義な会になった。

第二回からは、「子どもと親の集い運動会」として、会の精神を引き継がれている。

〔巻末資料参照〕



小中合同特殊学級野外活動「かいはつ」より

ようでした。また、三年生の子供たちは翔平君のことを考えずに、自分たちの好きな遊びをしたいという気持ちが強く、相手のことを考えられないようでした。そこで、研究授業では、三年生の子供たちが翔平君の気持ちを考えて遊びを考えていくことと、自分たちも一緒に楽しめる工夫ができることを目標に話し合いをしていきました。

翔平君は、音楽や踊りの好きな子です。活発な子なので、話し合いをじっと聞くことができませんでした。何度も教室から出て、脱走をしました。その度に、ガッツチームから健太君、作造君、有希さん、鮎子さんと翔平君を追いかけてかわり合える子供たちが増えていきました。そして、研究授業の日には、翔平君が喜ぶことをしたいという気持ちが強くなり、翔平君の好きな音楽を取り入れた活動を考えていきました。子供たちが困った時や話し合いがうまくいかないときに助言をしていきました。研究授業では、紅白歌合戦を

しました。ガッツチームを紅白に分けて、それぞれの歌いたい歌を歌いました。子供たちで司会や審査員もしました。子供たちに準備をすべて任せてあったので、少し不安はありましたが、リーダーを中心にうまく行っていたので安心しました。

この三年生とのふれあいタイムは、三年生とのかかわりがなかった私にとってよい交流となりました。翔平君もふれあいタイムで遊ぶのを楽しみにしています。一人っ子の翔平君に兄弟がたくさんできたようです。お兄さんやお姉さんからいろいろな遊びを教えてもらい、翔平君のできる遊びが増えました。



プールで遊ぶ翔平

高齢者と楽しく遊ぼう

根石小学校 平野 泉

学校から歩いて十分の所に、老人保健施設があり、三年前から本校の小学生と高齢者の交流が始まりました。

おばあちゃん、こんにちは。人なつっこい春男は、初対面のおばあちゃんたちに挨拶をして、双六遊びを誘いました。サイコロの目を数えながら駒を進める双六遊びは、介護を必要とする高齢者にとっても、月星組の児童にとっても、共に楽しめる遊びでした。自然な笑顔が双方に見られて、ほほえましい時間が過ぎていきました。

それからは、オオバコ相撲、絵本の読み聞かせ、折り紙遊び、カルタ取り、福笑いなどの楽しい遊びを学校で練習して、おじいちゃんやおばあちゃんに会いに行きました。毎週金曜日が来るのが待ち遠しい交流になってい

特殊教育部コラム

教材教具開発サークルについて

教育委員会の補助を受けたサークルである。特殊学級の子供が、喜んで活動できる教材・教具の開発が設立の意目的である。

過去に開発した教材教具を紹介する。

・牛乳パック利用の紙すきセットと紙すき方法

・簡易綿菓子製造機

・電池で作るパン

・お金シール

・製作したくなる材料作り

・色砂・木切れ・ホットボンド

・クリスマスリース

・コピー教材

・おもしろ調理

・おいしいたこ焼き、どんぐりクッキー

(巻末に参考資料あり)

きました。

ご存じ『水戸黄門』の時代劇を練習して、友情出演の児童たちと一緒に披露しました。かわいらしい黄門様ご一行の姿に、涙を流して喜んでくださる方もみえました。

自分たちの発表が、大勢の高齢者に喜ばれることを体験した子供たちは、手品を練習し始めました。手の平から、赤いハンカチを取り出したり無くしたりする春男。一枚の薄い紙を机に立てて、その上に水が入ったコップを載せる夏男。コップに入った墨汁をきれいな水に変える秋男。二個の丸い玉を一個の立方体に変身させる冬男。練習して得意になった手品を、たどたどしい手つきで発表する子供たちの緊張感が会場に伝わっていきます。

大成功の拍手が響く中、高齢者と六人の子供たちがお互いの障害を乗り越えて共に楽しんだ交流活動でした。元気な子供たちの笑顔は家族と離れて施設で暮らす高齢者にとって、何よりうれしい贈り物となりました。



高齢者の方とすごろくを楽しむ

よろこばれる存在に

岩津中学校 篠原 正樹

崇雅君はマッサージが上手。和也君は細かい作業ができる。隆博君の歌はプロ並み、天神太鼓もたたける。美和さんのギャグは目のつけどころがすごい…。五組の生徒たちにも、当然特技や長所があります。そんな長所を生かすことなどで「君がいてくれてよかった」と言ってもらえる人間になってほしいと思います。

そこで岩津中五組では、川や海の大きな汚染源のひとつである『米のとぎ汁』に有用微生物群『EM』を入れ、発酵させた液を流したり配ったりしています。この発酵液のことを、我々は『キッチンEM液』と呼んでいます。これを流すことによって川や海の水をきれいにしたり、ヘドロを減らしたりすることができます。しかも洗剤の代わりに洗濯や食

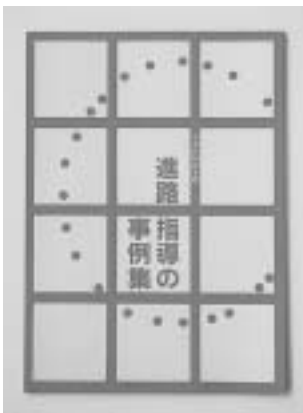
特殊教育部コラム

進路指導の手引きについて

平成三年度末、中学校特殊学級の指導事例集をまとめた。

それまでの指導の事例の中から、項目ごとにまとめた指導事例と、特殊学級担当経験の少ない教師にも、進路指導の流れが理解でき、指導実践にむすびつくよう「指導の手引き」がそえてある。

中学校特殊学級卒業生の進路先は進学率が高まり、就職先を探すことが極端に少なくなってきたが、将来の職業自立に向けて、教育現場では考えなくてはならないことが多くあることが読み取れる。



器洗いができるので、これを使えば『生活イ
コール環境浄化』という形になります。

昨年の九月から、毎週木曜日に行われる岩
津農協の朝市において、関心を持ってくれた
お客さんにさし上げることから始め、現在で
は生徒が運んでいくところだけでも『スーパ
ーいれぶん』『喫茶アジュール』『レオナ第二
幼稚園』に広がり、『おかざき農遊館』にも
交渉中です。

とき汁をもらいに行ったりキッチンEM液
を持って行ったりすると彼らにいろいろな声
をかけてもらえます。そんな、かわりも担
任としてうれしいことです。しかし何より、
キッチンEM液がどんどんへり、代わりにカ
ンパが集まっていることを見れば、自分たち
のしたことが喜ばれていると、理屈ぬきで実
感できます。

五組の子たちの活動が、『奪い合い』の社
会から『分かち合い』の社会への変化の力に
なると信じて、無理のない範囲でこの活動を

続けていきたいと思えます。



EM液のピンづめをする生徒

絵と文字と声と

広幡小学校 榊原 康雄

明君は四年生。言葉がなかなか出ない。しかし、文字には興味があり、書くことを好む。一本一本の線にこだわって、時には書いた線の上をもう一度なぞったりする。力を入れ過ぎるため、書く速度は遅い。

教科書を黙々と写すこともある。このような音韻を伴わない学習は、学習の効果が少ないと感じた。これまでも、言葉を自分のものとしていくため、具体物から取りかかる学習を組んできたと思われた。

教室には絵と文字を組み合わせた視覚教材が、幾種類か備えられていた。彼はそれらについて、絵の横に正しく平仮名や片仮名を書く。平仮名と片仮名を混同することもない。「はごれ。」と聞けば、誤りなくそのものを指さす。音韻は彼の口からはなかなか聞か

特殊教育部コラム

岡崎市特殊教育推進協議会について

特殊教育の推進を図るとともに、適正な就学を目指すために、協議会が発足した。昭和45年のことである。前年度、特殊教育部長深津・柄沢両校長のご尽力により、発足した。この会が、就学に関する知能検査の実技講習会、資料作りの検討、実際の相談活動を推進した。

昭和50年、法制化に伴い発足した就学指導委員会に至るまで、岡崎の就学に関する基盤作りに大きな役割を担った。(「かいはず」15号、昭和61年より)



子供の作品から

れないが、人の口から発せられる音韻は理解しているのである。備えられた教材に不満があるわけではないが、より彼の心に沿ったものを作ってみたいと、ある日思った。一本の線にこだわる彼の心に。

「こだわる」と「凝る」とは類義語と考え、絵にしても「凝った絵」にしてみよう。もしかしたら、その方が簡略化された絵よりも彼は興味を示すかも知れない。題材は日常生活で目にする物でよいから、なるべく克明に描写することを心掛けることにした。

B4用紙に二十の絵をかき、右に名前を書く欄を設けた。教室、職員室、玄関、台所、目につく物を次々に描いていった。物というものは生活の中にこんなに多く使われているのか、改めて認識した。

はたして彼は新しい教材に興味を示し、いそいそと学習に取りかかった。学習方法は従来と何ら変わりはないから迷うこともない。母親に見てもらったため家に持たせた。母親が

ら「明が喜んでやります。続きをお願いします。」という連絡を受けた。

明君は記憶力が良く、多くの物の名前を覚え、覚えたら忘れない。彼の世界は少なくとも広がったはずである。このような取り組みは他の学習へも広がると思う。いつかは念じて、同工異曲であるが、算数の教材に取りかかる。



田植えの始まりどろんこ遊び

今が旬！

美川中学校 田島 広嗣

特殊学級の担任にとって、日々の授業をいかに成立させるかと言うことは、難しさもあるが、取り組み甲斐のあるところでもある。

まず、子どもの実態がある。興味や関心、技能、これまで積み上げてきた学習の段階、様々な観点からつかんでおきたい。

一方、指導する側は、子どもが好きだから何でもやらせるのではなく、教科・領域など教育課程のどこに位置づけられるかをはっきり押さえておきたい。

この二点、子どもの実態と教科・領域の位置づけを結びつけるところに、特殊学級の授業づくりのおもしろさ・たのしさがある。教材・教具の開発もこの二点を結びつける有効な手だてである。

小学校特殊学級で指導した事例を紹介した

特殊教育部コラム

学習委員会について

特殊教育部における学習委員会は、過去においては、学習・広報委員会として、機関紙「かいはつ」を発行する広報委員会と合同して活動する時期もあった。もともとは、部内の研修を推進する委員会で、研究収録や指導案つづりをまとめたり、授業研究会、実技講習会、自主研修会を企画する委員会であった。現在、部全体で、この会を持つことはなく、ブロック研修会に移行している。（巻末資料、ブロック研修参照）

特殊教育部初期の活動には、特殊学級の教育課程を作成したり、授業研究会の企画、特殊教育部の研究テーマ検討・推進で、大きな役割を担った。（巻末資料、年度別研究テーマ参照）

い。明子は、3までの数の概念がきつつかある段階であった。この明子を入れて、クラス六名ほどで算数としてすころくに取り組んだ。明子の人なつこき、数の学習段階、手先のスキルなどから、数図が3までの大きいサイコロを用意した。このサイコロの数図は、マジックテープにより取り外しができ、すころくの進度に合わせて置くことができるようにした。

明子は、大きいサイコロを持ち上げてふる。出た目の数図を取り外して、すころくの道に一つずつ置く。明子は、自力で自分の駒を進め、学習の楽しさを皆と共有したのである。

次に、中学校の特殊学級の実践を紹介したい。竜男の絵画能力は、小学校低学年段階であった。画用紙に絵を描かせると、あつという間に描いてしまう。あとに残る授業時間はやることなくってしまうのである。そこで、じっくりといねいに描かせることをねらいに、シナベニアで大きめの羽子板の形を切

り抜いたものを用意した。竜男以下、どの生徒も木に描く体験は少なく、紙とはちがう材質や、自分の唯一の画材という意識から、慎重に描きつづけた。下絵の描き方、カーボン紙を使って下絵を転写すること。そして、ペインティング。製作段階を押さえて指導事項を盛り込むことができた。

教材・教具の開発は、食材とお客を前にする料理人の創意と同じなのかもしれない。今が旬の食材をさがし、いかにお客さんに提供するか。このお客さんは、何を提供すると喜んでくれるのか。料理人の腕の見せ所は、教材・教具の開発をになう担任の腕のみせどころでもある。



はごいた

あたし勉強大好き！

井田小学校 兼松 ゆかり

英子さんは記憶力がよいにもかかわらず、新しいことを受け入れようとしないこだわりが強い子であった。通常の学級の授業ではお絵かきをしたり、文字をなぞったりすることで、ひたすら時間が過ぎることを待つ生活だった。

入級してまもなくの授業でも、英子さんは機械的な活動である視写はやるうとするが、自分で思考を必要とする課題を出すところ、このやりたくない。」とやるうとしない。学んで分かったという経験がほとんどなかった英子さんにとって、勉強は苦痛以外の何ものでもなかったようだ。

四月にシャボン玉を教材にして授業を行った。すると英子さんが突然席を立ってシャボン玉を吹き始めた。目をきらきら輝かせて何

特殊教育部コラム

学級要覧について

平成八年度まで、各学校、学級の実情を紹介し合い、学級経営上の参考にしよう、学級要覧をまとめた。

内容は、学級の経営方針、子供の実態、教育課程、指導内容、週時間割、学級経営上の問題点である。

特殊教育部の創設期には、この要覧が学級経営のよりどころになり、大きな情報源であった。各特殊学級が、それぞれ歴史を重ね、経営方法の蓄積が大きくなり、その役目が終わったのが、平成八年である。

しかし、学級経営上の問題点に挙げられた、能力差による指導の困難さ、将来に対する見通しは、今の私たちも持ちつづけているテーマになっている。



度も何度も吹いている。そしてその日、英子さんは家に帰ってから自分でシャボン液を作って遊んだ。学校で学んだことを自分から家で実践することは今までに全くなかったので驚きであった。

こんな英子さんの姿を見て「これなら、英子がのつてくる学習場面を作り出すことができる。」と考え、シャボン玉の研究、通常の学級との交流へと発展させていった。英子さんは、その中で興味のある活動に少しずつ参加するようになっていった。

その後、誕生日会でべっこうあめを作る計画を立てた日には、家で母親とべっこうあめを作った。そこから発展してカルメ焼きも家で作った。学んだことが楽しければ必ず家でもう一度やる。英子さんは学んだことをどんどん吸収し、やりたいことがいっぱいになっていったよつである。

国語や算数の学習にも意欲を見せる



シャボン玉を吹いている私

ようになった。もちろん新しい課題に直面したときには「こんなの難しい。」と一度は抵抗するが、やり方が分かると「あたしこれ好き。」と調子に乗ってどんどんやり続ける。学習することが自分にとって楽しいことだという実感が持てたよつである。

分かるとうれしい経験をした英子さん。最近では「あたし勉強好きだもん。」とつぶやいている。

おぼえたよ

竜美丘小学校 澤 幸子

「おはようございます。」

今日も元気なあいさつで一日が始まる。子供たちの目は、濱井先生が持ってきた紙袋に集中している。今日は何が出てくるのだろうか。

四季折々に見かける草花や木の実、木の葉に触れながらその季節を感じ、名前が言えたらという願いがある。

「わー、真っ赤、きれい、食べられるの。どこでとってきたの。」

紙袋から出てきたものは、からすつりだ。形や色に心を奪われながら種を出し、

「かまきりの顔みたい。」

と言ったのは太一君だ。感性豊かなとらえ方のできる子であるが、名前を覚えるのが不得手である。遊んだ後に、名前を聞くと首を傾げるばかり。太一君は、交流学級の担任の名

特殊教育部コラム

福祉読本「ふれあう心」について

昭和六十年四月、岡崎市社会福祉協議会の委嘱を受け、特殊教育部で中学生対象の福祉読本を発行した。

巻頭に、郷土の篤志家「大絵恒」の物語を取り上げ、奉仕ボランティアの考えをとく。発行時点の福祉関係施設、関係機関をわかりやすく説明し、生徒の作文、詩などで、福祉の心について考える内容である。

「生きる力」を育てることを中心課題とした総合的な学習の参考書として、活用できる福祉読本である。



前を一年かかって覚えた。父親の名前を「ばく知っているよ。田中パパだよ。」と思い込んでいる。そんな太一君に、身近なものとしてとらえているからすとうりを合体して、からすうりになることを話した。翌日、黒板にかけてあるのを見て、

「からすうりだ。」と叫んだ。

十二月半ば、各教室にシクラメンが配られた。見たことのある花であるが、名前は分からない。

「この花の名前ねえ、シクシク…」とヒントのつもりで言ったが反応はない。

「シクラメン」

とみんなで何回も言い合う。

帰りの会に花の名前を聞くと、

「何だったっけ。」

という調子である。

「シクシク泣くよね、ラーメン好きだよね。」シクシクとラーメンを合体してシクラメンに

すると覚え易いだろうとの思いがあった。

次の日の朝の会、花を前にして、太一君は「シクシクラメン」

と答えたので爆笑。本人も爆笑。素直で正直な太一君らしい。この笑いがあつたからこそ正しい名前が覚えられた。

その後、太一君の家から、家であまり見せてやれない季節のものに触れさせてもらって喜んでいる旨の手紙をいただいた。覚えた名前を誇らしげに話しているだろう太一君の姿が浮かんでくる。



「からすうり」の名前を覚えた太一

かめさんだいですき

連尺小学校 村谷 宣子

入学して間もない、ある日のこと、教室にカプトムシの幼虫がやって来た。

和君は虫や汚れた物を嫌う。そんな和君が土の中でモゾモゾ動く物を見つけた。土にさわることも嫌う和君の顔はひきつった。

その横で、秋さんが土の中から幼虫をつかみ出し、手のひらの上で遊ばせている。

「和ちゃんもつかんでみるか?」

と山田先生が言うと、

「うん」と言ったけれど、手は出せない。素手では掴めないと思った山田先生は、和君に軍手をはめさせた。なるほど、こうすれば怖がらずにつかめるのか。和君は虫への恐怖が少しずつ減って、自分で掴んでみようという意思が出てきたようである。秋さんと一緒に真剣な顔で、幼虫を掴むことができた。

特殊教育部コラム

招待「映画鑑賞会」について

平成二年七月、ツイエンターコーポレイション様のご好意により、特殊学級の子供の映画無料招待が始まった。夏休み前から夏休み前期中の時期で、各学校の実情に合わせ、映画鑑賞会が現在も行われている。

鑑賞映画は関係映画館の中から選択でき、子供たちの待ち望んでいる会となっている。学校によっては、映画館まで交通機関を使う学習となったり、買い物をする機会を同時に企画するなど、生活単元学習を大きく展開する場ともなっている。



子供の作品「グレムリン2」

翌日は、ウシガエルの登場である。バケツの中の大きくてグロテスクな姿を見た和君はギョツとした。その大きなカエルが教室の床の上に出された。そして、ビヨーンと飛び跳ねたのでたまらない。

「ギャーッ」

という叫び声と共に、和君も跳び上がった。足が思うように動かない彼は、転びそうになりながら逃げた。後ろを振り向くと、また、カエルがビヨーンと跳ねた。

「ギャーッ」

叫び続けて教室の外へ出て行ってしまった。一年生の教室の端の方まで行って、帰って来れない。

「和ちゃん、大丈夫だよ。帰っておいで」

と言つても来れない。すごいショックと同時に興味を抱き、それ以後、

「カエルは？」

の連発で、カエルがどこへ行ったのか気になつて仕方がない。

そして、興奮がさめないうちに、今度はカメがやって来た。

カメは、カエルよりのんびりしている。これも最初はつかめなかつたけれど、二、三日たらいの中にいる間に少しずつさわられるようになり、大好きになったのである。

珍しい物が次々と学校に現れるので、和君は学校へ来るのが楽しくて仕方ないようだ。



亀と仲よしになった和君

だんご虫もありも友達

広幡小学校 吉橋 祐子

一年生の綾ちゃん、洋服が汚れるのが大嫌い。水が一滴こぼれただけでさあ大変。

「これぬぐ。これぬぐ。」と叫んでひっくり返って泣きわめく。鼻水と涙でぐしゃぐしゃの顔になる。手に負えない。それに機嫌のいい時でも怒った顔に見える。綾ちゃんはめつたに笑わなかった。

田んぼで泥んこ遊びを体験させてから変わってきた。全身泥だらけになってからそれほど汚れを気にしなくなった。土いじりもできるようになった。

学級の花壇の草取りをした時のこと。虫の嫌いな綾ちゃんが、だんご虫を見つけて悲鳴をあげた。

「この虫はちつとも怖くないよ。ほら見てて。触ると真ん丸くなって、だんごみたいになっ

特殊教育部コラム

交流アンケート

交流対象が、校外の場合どうであるかを問うものである。交流の数は少ないが、地域に出て行く特殊学級の姿が浮かび上がる。ブロック交流会とは、中学校学区を単位とした特殊学級間の交流を言う。

少数数化が特殊学級でも言われ、この特殊学級間の交流は、学級の学習をダイナミックに展開する一つの解決策である。ほとんどの学校で、この交流が行われていることが分かる。校外でも、のびのびとした交流する姿が見られるということで、このような数になっていると考えられる。

担当者からは、「子供への接し方、指導法を直接体験できる研修の場となっている。」という声が聞かれる。

「ちゃうのよ。それっ。」

「ほんとだあ。」

「綾ちゃんもやってみる？」

「やだ。こわい。」

「大丈夫、大丈夫。」

なかなか手を触れようとはしなかったが、興味深げにだんご虫を見つめていた。もう、だんご虫は平気になった。

次にありを見つけて、また大騒ぎをする。

「こんなにちっちゃなありさんの方が、大きな綾ちゃんを怖がってるよ。」

そんなことばも耳に入らないようだ。

「きゃあ、虫、きゃあ。」

「ありさんはね、綾ちゃんのごぼしたクッキーやお砂糖を、ごちそうさまって言いながらお部屋に運んでいるんだよ。ありさんのお部屋は、この土の中にいっぱいあるの。」

綾ちゃんも行ってみたい？」

怖がってばかりいた綾ちゃんが、急に土の中をのぞき込んだ。

「うん行く。ありさんのお部屋へ行く。」

綾ちゃんは、大きな足をグイグイと土の中へ押し込んだ。土の中に広がる冒険の世界へ踏み込んだ。一生懸命ありの動きを目で追っている。いつの間にか、ありと自分が同じ大きさになっていた。



土に触れる彩ちゃん

ヒメジヨオンの花

男川小学校 小林 泰子

「これ、おいていく。」

明日は、二学期の終業式。私が渡した冬休み誌をとし君は、机の中に入れてしまった。私が何と言っても、とし君は聞いてくれないようだ。だから、私は、とし君がいないときに、こっそり冬休み誌をランドセルにしまった。

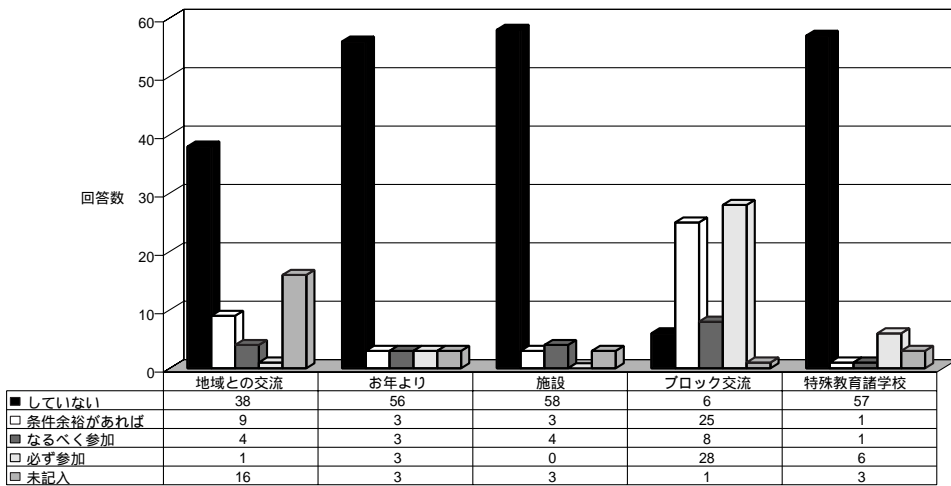
しかし、とし君は帰るとき、机の中に入れてはずの冬休み誌がないので「ない。ない。」

と言って、ランドセルの中にある日誌を探して、出してしまった。

仕方がないので、冬休み誌は明日、終業式に渡すことにした。

今まで、四組の畑で取れたミニトマトやじゃがいも、それで作ったフライドポテトなど

交流対象について



を、とし君は、持ち帰ることをいやがった。でも勝手にランドセルに詰めてきた。トマトやじゃがいもが、とし君の家庭で話題になるといいなあと思っていた。でも、とし君を飛び越してお母さんとのつながりを持つとうとした私の押しつけだったかも知れない。

それから後、学校近くの道路にオナモミを探しに行ったとき、とし君がヒメジオオンという野菊の花も取ろうとしたので、「お母さんに持っていく？」と聞いてみたら「持っていく。」と言った。私は、とし君は持って行かないと思っていたのでびっくりした。二期の保護者会で、お母さんはヒメジオオンの花がうれしかったとおっしゃった。

終業式の日、とし君は

「今日、帰ったらテレビ、ふく。」

と、家でお手伝いをすることを教えてくれた。

しかし、日誌は、なかなか持って行くことがしない。

「とし君、冬休み日誌を持って行ってね。」

もうすぐ、一斉下校の合図が始まるというとき、とし君は、日誌をランドセルに入れた。とし君が日誌をランドセルに入れたので、ほっとした。

ヒメジオオンの花、そして冬休み日誌を通して、とし君をもっと理解してあげなければいけないと思った。



さわがに

元気なあいさつ

矢作中学校 三輪 教子

「おはようございます。」

と、日直にあわせて朝のあいさつが始まる。和子はうつむいたまま、ぼそぼそとした声であいさつをしている。

和子さんが放課に友達と話すときは、とても元気で明るい。しかし、あいさつや自信のない授業になると、声量も表情も乏しくなってくる。他の生徒も、声を掛けてもらえば大きな声であいさつができるが、自分から進んではしつかりとしたあいさつや発言ができない。

あいさつや話し方次第で相手の印象も変わり、より良い人間関係を作るきっかけにもなるので、是非、積極的にあいさつや発言ができるようになってもらいたいと思った。

そこで、日ごろの生活を通して、あいさつ

特殊教育部コラム

交流アンケート

校内における教科交流以外の交流の場についてアンケートをした。圧倒的に「委員会活動」と回答する数が多い。特殊学級の担当者も委員会活動を全校体制で取り組んでおり、その場へ特殊学級の子供も参加している状況がわかる。

『部活動』『登下校』『給食』『清掃』でも、交流が進んでいることが分かる。

また、すべてを交流にすると特殊学級自体が希薄な存在となる。子供たちの実態を考え、交流をすすめていくことの難しさがある。

をする機会を増やすことにした。また、声を出すことが苦手でもあるので、国語の授業の中で発声練習などを行うことにした。

あいさつの機会を増やすために、職員室に行って、いろいろな先生に声を掛けてもらった。また朝の会、帰りの会に、「どんな時にどんなあいさつをするか」を学び、友達同士であいさつの練習を行った。練習をすることで、和子さんは「いろんなあいさつがあるね。今度、先生に言ってみるよ。」と、自分から進んであいさつをしたいという気持ちが、少しずつ芽生えてきたようである。

発声練習では、声を出すときの姿勢や、口の開け方、発音の仕方などをビデオで学習した。発声練習を行うことで、声の出し方がわかってきたようで、一つ一つの言葉がはつきりし、相手に伝わりやすい発音が、できるようになってきた。

このように、日常生活の中で声を出す機会を多く持つことにより和子さんをはじめ、ほ

かの生徒たちも声を出す楽しさがだんだん分かるようになってきた。そのせいか、あいさつだけでなく、いろいろな場面で声を出すことが増えてきている。音読では物語を、しっかりと口を開けて読めるようになってきた。また、日ごころの活動の中でも、今までは、身振りだけで関わってきた場面でも、お互いに声を掛け合いながらの行動が多くなってきた。

どの生徒も人と関わるのが好きなので、それを生かせる指導を今後も考えていきたい。



楽しく聞くことができた音読発表会

日常生活から

今日もお話できるかな

矢作東小学校 山本 純子

「あれ、ちえちゃんがいらない。保健室だな。」
保健室にお迎えに行くと、

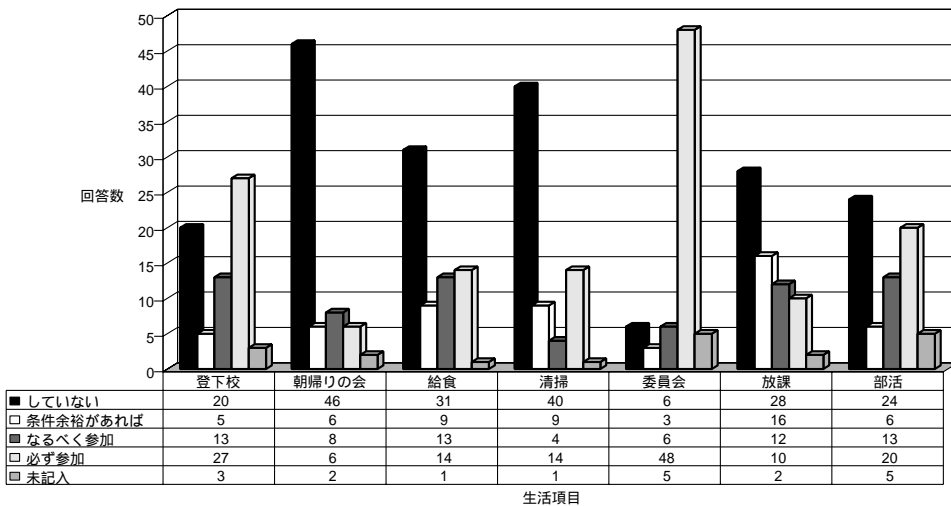
「うふふふふ。」

毛布の中から笑顔が見える。ちえちゃんは、保健室のベッドでくつろぐのが大好き。毛布やシーツが気持ちいいんだね。

ちえちゃんは、ブランコも大好き。気持ちよさそうにブランコをこぐ。絵本も大好き。

『となりのトトロ』に出てくるメイちゃんに呼びかけ、絵本のメイちゃんとお話する。大好きなことがたくさんあるから、ちえちゃんは放課、一人で遊ぶ。学級の友達や担任の名前はちゃんと覚えてる。でも一緒に遊んだり、話しかけたりすることは、ほとんどない。そんなちえちゃんが、一学期、黒板消し係になった。ちえちゃんは、仕事が気に入って、

生活全般の交流について



放課になるとすぐに黒板を消すようになった。しかし、一時間続けて授業をするときや、発言の記録をとっておきたいときなど、黒板を消しては困るときもある。

ある日のこと、ちえちゃんに黒板を消してはだめと伝えて、記録をとっていると、

「先生。」

と声がする。顔を上げると目の前にちえちゃんがいる。

「黒板、いい?」

びつくりした。ちえちゃんが、先生って呼びかけるなんて。黒板、いいって聞かなくて。驚きとうれしさで、思わず、

「いいよ。」

と言ってしまった。それから、ちえちゃんは、言うようになった。黒板を消したいとき、

「先生、黒板、いい?」

と聞くようになった。

その後、少しずつ、ちえちゃんはお話をするようになってきた。書けない漢字があると、

「先生、やる。(教えて)」

パソコンのゲームをしたいとき、

「先生、キティちゃん、やる。」

そして昨日は、初めて、「行ってきます。」

と言って、お母さんを驚かせたそうだ。

ちえちゃんがお話をすると、私たちは嬉しくて、笑顔で応える。ちえちゃんも、気持ちが伝わったことが、喜びや自信になっているの
だろう。少

しずつ、お

話する日が

増えている。

今日も、

ちえちゃん

とお話でき

るかな。毎

日の楽しみ

が、一つ増

えた。



ハロー！ ジョー先生

才能発見の楽しみ

新香山中学校 岩瀬 信子

友君がいない！あわてて体育館を出て、南舎二階の教室まで走った。

総合学習の成果の発表会。すでに一年生全員と保護者、それに総合学習を支援してくださった学区の講師の方々が着席していて、まもなく県教委及び市教委の指導主事も校長室より入場してくるといふ矢先であった。こんなはずれた行動をすることは初めての出来事である。

当日、私自身の役割分担もあわただしかった。給食を早めに済ませてから、総合学習で和菓子を作った生徒とお茶のお点前を練習した生徒が、来賓の接待をするということでき添ったのである。

友君には、体育館シューズを持って交流学級へ行くように指示しておいた。彼自身もこ

特殊教育部コラム

手紙より

中央ライオンズクラブのおじさんへ

招待映画ありがとう

岡崎グラウンドで、映画ディズニーの「ティガームービー・プーさんの贈り物」を見ました。とても面白かったです。物語りは、本の中から、ティガーが登場しました。ティガーが主人公でした。(中略)僕は見ました、ティガーが楽しそうにピョンピョン飛び跳ねているのを。(中略)僕はルーが家族がいるのに、ティガーにも家族がいるのを思い出しているのを見て、心臓がドキッとするほどびっくりしました。(中略)

僕は、この面白かった映画を絶対忘れません。有り難うございました。

(平成十二年九月号の「かいはつ」掲載)

の日のために、郷土の伝承和太鼓である「ちやらぼこ」の練習をしてきていた。ステージ発表のリハーサルも済ませていたので、予定通りに行動してくれるものと思つて疑わなかった。

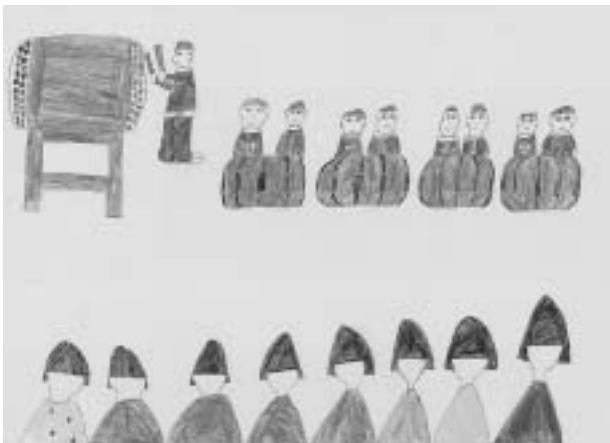
教室にいない。教室から見える北舎の第一音楽室（ちやらぼこの練習場）にも姿は見当たらない。再び体育館に走り、ステージの袖も見た。いない。もう一度教室へ、途中で友君のお母さんに出会う。きつと楽しみにして学校へこられたのに我が子がいなくて捜しに来られたのではないかと思う。訳をお話して三度体育館へと向かった。居た。ぴったり開会の時間に入口に向かって走っているではないか。ほつ。間に合った。

ちやらぼこの演奏はばつちりだった。みんなは打法の紙を見ながら小太鼓をたたいているが、友君は、天井を見上げながら大太鼓をたたいて終わりはびたつと決めた。

翌朝、どこに居たのか聞いた。第二音楽室

で電子オルガンに夢中になっていたという。この時以来、友君の音楽に対する興味関心と才能を発見することになったのである。

入学以来、次々と彼の特技や才能を発見してきた。漢字、英単語、ワープロ、etc etc。まだまだ知られていない才能で新しい発見があるのではないか。そんな才能を発掘したり発展させたりする楽しみが、日々新たにある。



総合学習「ちやらぼこ」ステージ発表

自立への一歩

六ツ美北部小学校 畔柳 愛美

「先生！見て！」

と、自身満々の笑顔で歩く姿をアピールするゆみさん。

今、ゆみさんの生き生きした笑顔を見るのが私の毎日の楽しみである。

一年生のころ、ゆみさんは一人では歩けず、ほとんど教室をはって動いていた。病院の歩行訓練で一人で五メートルほど歩けるようになったものの、学校では恥ずかしい気持ちや友達と手をつないで歩きたいという気持ちから、なかなか一人で歩けなかった。自分で歩けたら、自分の好きな場所で好きな事ができる。なんとか教室の中だけでも一人で歩けたら。そんな思いから、ゆみさんが自分で歩けるように少しずつ声をかけてきた。

そんなある日、ゆみさんが初めて手洗い場

特殊教育部コラム

夏期実技講習会について

特殊教育研究協議会が昭和四十五年に発足されたのに伴い、夏期実技講習会も開催されるようになった。

この講習会は、夏休み中に開かれ、終日活気あふれる会になっている。

特殊教育に従事する教師の力量を高めるため、即現場で使える内容で、いろいろな講師を招いて実施している。実技講習の内容は、知能検査法、障害児への絵画指導、生活単元・作業学習に活用できる自作教具の制作実技、構音指導、音楽療法など、多岐にわたっている。

また、昨年度の岡崎市教育論文入賞者より、実践論文のまとめ方を学ぶ機会もあり、充実している。

巻末付録に、過去の講習会の内容一覧を載せた。

まで歩いた。

「手を洗いに行くよ。」

と言つと、いつものようにゆみさんは「先生。」と呼んで手助けを求めた。

「ゆみちゃん、ここまで一人でおいで。だいじょうぶ。ゆつくり歩いておいで。」

と、両手を伸ばし、ゆみさんが来るのを手洗い場で待った。不安そうに少し考えたゆみさんだったが、一歩、二歩とバランスをとり、体を支えながら歩き始めた。

「そう。じょうず。じょうず。」

「ゆみちゃん。がんばれ。」

と、ゆりさんもあきさんもいっしょに応援する。

「あともう少しー!」

「あともうちよつとだよ。ゆみちゃん!」

「やったー! ゆみちゃん、歩けた、歩けた。」

子供たちと一緒にゆみさんの頭をなでて喜んだ。

「ゆつちゃん、すごいでしょう!」

と、ゆみさんも大満足の笑顔を見せた。

ゆみさんの踏み出す一歩は自立への一歩と

なった。自分で歩き、自分でできるといふ喜びが、ゆみさんの自信となり、挑戦することへつながっている。四年生になったゆみさんは「一人でできるよ!」とトイレへの移動など自分ひとりでできることが増えた。ゆみさんから努力する事の大切さを学び、成し遂げる喜びを共に味わえたことに感謝したい。そして、これからもゆみさんのさらなる一歩を応援し続けていきたい。



クラス勢ぞろい

レンジでチーン

細川小学校 石川 修

「泰子ちゃん、このおかず、レンジで三十秒チーンして。」

「はい。」

三十秒後、温かくなったおかずをレンジから出して配膳し、いただきますをして食べ始める。これがわがクラスの給食開始の様子である。

はじめて特殊学級を担当して給食の時間を迎えたとき、冷え切ったご飯とおかずに驚いた。人数が少ないから冷えてしまうのは仕方ないけれど、こんなに冷たくなったご飯やおかずを子どもたちに食べさせるのはかわいそうだ。四月でもこんなに冷たいのに冬になったらどうなるのだと、ぞっとする思いであった。

そこで、学校からの帰り道、わたしはリサ

特殊教育部コラム

情緒障害研究サークルについて

学級内に自閉的傾向の子供が入級するようになり、昭和五十五年、その指導方法を研究する会が発足した。

情緒面で関わりに問題があり、通常の対応・指導では、なかなか指導の効果がでない子供たちには、どのような接近の仕方があるのか、こだわりの強い子供の理解に苦しむ場面、指導事例紹介など、学級での様子を気楽に語り合える場を持つことは、会に参加する教師に活力を与えることになった。

昭和五十九年、自閉症の子供をスクリーニングする自作の基準「ATACL（アタックル）」を作り、岡崎市の特殊教育の水準を引き上げる原動力になった。

昭和六十三年、このサークルは、教材教具開発サークルと方向を変えた。

イクルショップに立ち寄った。今はとても便利な世の中である。コンビニに行けば電子レンジで温めて食べられるレトルト食品を数多く売っている。

電子レンジを使えるようになれば、自分で好きなものを温めて食べられるであろう。冷たい給食を温めて食べる。電子レンジの使い方を覚え、自分の好みの食品を食べられるようにする。このふたつの目標を果たすために電子レンジを買うことにしたのである。

電子レンジを使い始めたころの会話である。

「泰子ちゃん、このフライ三十秒チーンして。」

「はい。」

（おかしい、いつまでたってもチーンと鳴らない。）

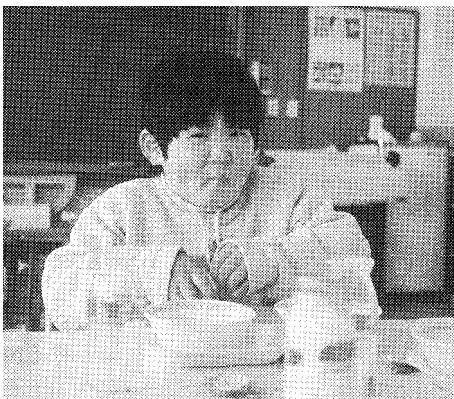
「泰子ちゃん違うよ。コレじゃあ三十分温めることになっちゃうよ。三十秒は、0と1の間のこの線のところだよ。」

というように三十秒温めるときはどこまでダイヤルを回せばよいか、なかなか覚えられない。

かった泰子さんである。

しかし、何回か失敗を繰り返すうちに、正しく三十秒にセットできるようになったのである。

電子レンジを導入することにより、冷えたご飯とおかずから解き放たれた。温かいご飯とおかずを食べていると心が豊かになった気分になり、おいしく食べることができた。以来、給食の時間のたびに電子レンジは活躍し、温かくおいしい食事を楽しんでいる。食べ過ぎて体重オーバーにならないように気をつけて。



おいしい給食に満足顔

共に育つ

北中学校 犬塚 順勝

一年が過ぎようとしている。

毎日毎日が、驚きというよりも新しいことの発見の連続、というところが正しいのかもしれない。

初めての特殊学級担任という自分自身の立場を考えれば、とにかく肩ひじ張らずに自然体で、と思いはするものの、それでもついつい気張ってしまう。

さて、給食である。トイレを済ませ、手を洗うのに五分、白衣を着るのに七分、配膳室まで到着するのにさらに数分。

ここでは、『手際の良い配膳』などということは、全く意味をなさない。

むしろ、給食の準備・会食・片付けについてどこまでどんな援助ができるのか、という観点に至ってしまう。

特殊教育部コラム

指導案綴りについて

昭和六十一年度より、各学校での研究授業の指導案を冊子にしている。「個別の力を把握し、どのような手立てで、授業を展開していくのか」少人数、能力差に対応した教師の工夫や実践を読み取れる。

近年の傾向では、二十時間を越える単元構成の指導計画や、交流を中心にした指導案が数多く見られるようになってきた。

特殊学級を初めて担当する者にとって手引きとなることを願っている。

平成五年度以降、巻末に、目次を掲載している。キーワードから、目的の指導案を検索することもできる。



食缶一つを運ぶこと、お皿一枚取り上げて盛り付けすること、そして食べることの一つ一つについて、根本的な教師としての眼力というのか、視点というものを問われ続ける。

一つ一つの基本的な動作・行動について、一つ一つの指示・支持・援助がどんな意味を持ち、なおかつ生徒一人一人の自立支援につながるのか、一瞬一瞬が問われ続ける永遠の瞬間である。

教えることと教えてもらうこととは、ここでは全く一体のものになってくる。

とはいえ、どんな状況であれ、給食指導はほとんど毎日のように展開される。

『急がせない、急がさない』ということに気づくのに、まず、一週間かかった。

前進。

そして、一人一人の個性を生かしつつ、いかに楽しく準備し、意欲的にすすめられるようにするか、腐心した。そして、気づいた。

まず、足元から。

できることから一日一歩どころか、一月一歩で、ということに。

ともあれ。

ほとんどの場合、人の倍近く食べてしまう裕子さんの

「今日のおかずは、サイコー！」

「明日の献立は、何かな？」という笑み。

「昨日の夕飯はねえ、カレーだったんだよ。

お母さんのカレー、おいしかった。」と話しながら、右手と左手を器用に使い分け、会話をふりまきながら食べる良子さん。自分からは話しかけずに、黙々と食べる麻子さん。一人一人の満足そうな

食べっぷりに、こちらにも引き込まれる給食。

こういう瞬間にこそ、『共に育つ』瞬間があるのかもしれない。

ない。



いつも仲良し三人組

清掃は一日の始まり

城北中学校 保田 眞美

いつも一番に学校に来る恵君。恵君の朝いちばんの仕事は、窓を開けること。窓を開けてさわやかな空気いっぱい教室で準備をして待っています。

準備とは…

城北中の朝は、掃除から始まります。準備とは、学校に来て掃除のできる服装（下をジヤージ）に着替えることです。一年生の時は、この着替え準備がなかなか早くできませんでした。着替えるだけで掃除の時間が終わってしまうこともありました。しかし一学期も過ぎると、登校したらずぐに着替え、朝の会の前には準備万端、掃除体制を取れるようになっていきます。空気の動く教室で、今日一日いい気持ちで勉強ができるようにみんなで教室をきれいにします。

特殊教育部コラム

研究実践について

「基本的生活習慣の育成を目指して」と題して、連尺小学校では、昭和60年ごろ、内藤教諭を中心に、研究実践が進められた。

子供の実態から、学校での指導は、生活習慣の確立が第一であると判断された。内容は、あいさつ・身辺自立（排便・衣服の着脱等）である。言葉の学習に結びつけた「あいさつカルタ」の制作や「あいさつのうた」は、子供の興味関心を確実に把握した指導であった。身辺自立の指導でも具体的な指導計画が立てられ、その有効性が示されている。

特殊学級における指導のあり方の一例として、参考になる実践論文である。

（研究助成論文集…愛知県特殊教育連盟より）

今週、涼さんは雑巾の係です。文化祭のフ
ラワーシヨップで売ったシクラメンが窓際に
四つ並んでいます。涼さんは、いつもシクラ
メンの鉢の下をきれいにふくところから掃除
を始めます。園芸部でもある涼さんは、花の
世話を心がけていてくれます。

黙々と…

無言清掃。城北中学校の清掃時間は、十分
間。朝の会が終わると、すぐに掃除に取りか
かります。たった十分間なので、曜日ごとに
やることを決めておかないと、上手に教室を
きれいにすることができません。

「先生、今日は、黒板をピカピカにします。」
十分後には、チョークうけも、ようかん台も
きれいになっていました。たった三人の教室
掃除は、やるのがいっぱい。いつも真剣で
す。おしゃべりをしているひまはありません。

一生懸命…

「佳さん、今日は水曜日です。ビニルゴミの
日です。」

恵くんは、級長としていつもいろいろと声
をかけてくれます。佳さんは廊下掃除。廊下
掃除がゴミ捨ての係にもなっているので、佳
さんは一生懸命廊下をほうきではき、ゴミ箱
を持って、全力でゴミ倉庫まで早歩きをしま
す。佳さんは倉庫の前に見える先生にいつも
大きな声であいさつができます。爽やかなあ
いさつは、掃除をする気持ちを引き締めます。
この強行とも言つべき掃除が一日の始まりで
す。

私たちの教
室、一日勉強
する机、黒板、
今日もいつし
よに過ごすも
のたち。清掃
時間が充実し
ていると一日
が気持ちよく
過ごせます。



真剣に掃除をする恵君

特殊学級の担任になつて

南中学校 塚本 緑

昨年の四月特殊学級担当者となつた。

一学期は分からないことばかりが続き、まさに新卒のような日々であつた。時間割の立て方から、その子の既習段階を見つけ出し、必要なことは何か考えて教えるのは、今までのように与えられた教材をどのように料理するのかとは、また違った苦しみであつた。

私の情緒障害学級には、三年生の愛子さんと一年生の陽子さんがいた。二人だけなのでから今までに比べたら楽に違いない。この当初の私の思いは、とんでもない心得違ひであつた。愛子さんは自閉的な傾向があり、陽子さんは誰よりも話が分かるが聞き取りにくい言葉でしゃべつた。二人は得意教科もまさにさまざま。こんなに際立つた特徴ある子たちをどうやって教えたらいいのだろう。

特殊教育部コラム

過去の「かいはつ」原稿より

「怒つちやいかんよ」一部抜粋

…「誰がやったんだ。」と声を張り上げました。「先生、僕たちじゃないよ。」Hが、心外であると言わんばかりに答えました。「じゃ、誰なんだ。」「そんなこと、わからん。」犯人がわからないまま、いつものようにお説教を受けた彼らは、よほど悔しかったのでしよう。昼休みに、私の所へやって来て言いました。「きのう、部活動で8組を使った人がやったんだよ。6組の子が言つとつたよ。」「そうか、それは悪かつたな。」「せんせい、だからあんまりおこつちやいかんよ。」少人数ゆえに、一人の叱られる回数が多くなつていた彼ら。悪いところばかりが目について、子供たちをそのまま受け入れることのできなかつた自分を反省し、「のんき、こんき、げんき」の教育の難しさを教えられました。

「かいはつ」5号 矢作北中 小野先生の作文より

毎日が疑問符の連続であった。

最初の山場は、愛子さんの修学旅行であった。自由行動は一日半あった。私は、ガイドブックやパソコンで目的地までの経路を丹念に調べ、地図を拡大し、愛子さんと共に色塗りをして確認した。行き先はテレビ好きな愛子さんと考えて放送局にした。愛子さんは小学校時代まで風邪熱がもとでかんしゃくの発作を起こしたことがあった。対処法を家の方に教えていただき、それを何度も頭の中ではんすうした。私は彼女の体調に万全を期そうと思った。緊張した。それが裏目に出た。前日の荷物点検で、彼女は怒ってしまった。一年から愛子さんの成長を見てくださった学年主任の「このところずっとあんなことはなかったのになあ」の言葉に、自分の無力さを思い知らされた。

長い一学期が終わった。

私は自分の不勉強を恥じた。書店で『自閉症だったわたしへ』（ドナ・ウィリアムズ）

という本を見つけ、貪るように読んだ。そしてドナが障害や困難を克服する姿に愛子が重なり、心底気高いと思った。振り返って愛子さんの目線で見ると、私は何と思いやりがなかったのだろうかと反省させられた。

二学期になった。私は新しいことに出会うと、私はどうするか、だつたら子供たちはどうするか、かな、それではこのように与えていく、と重ねて考えられるようになった。

愛子さんと陽子さんによつて私が成長したのだ。



子どもと親の集い運動会での愛子

ありのままでもいいよ

三島小学校 岩附 恵子

一年前、通級指導教室『みどり』で拓哉君と出会った。表情のない子だった。口を開かない子だった。無理にしゃべらせようとするとにらみつけた。憎しみをぶつけるかのようにして。何が彼をこんなにもかたくなにさせているのだろうか？ 自分の考えや気持ちを自由に表現できるようにって欲しい！と切に願った。

みどり教室では、遊びを通して問題行動の奥に流れる感情をありのままに受け止め、共感していくことで、閉ざしている心を開き、自己表現できるように支援している。彼は将棋や卓球などを好んだ。一言もしゃべらず黙々と駒を動かしたり、球を打ったりする日が続いた。「自分の好きなようにしていいんだよ」「ゆっくり待っていてあげるから、心

特殊教育部コラム

通級指導教室について

現在、岡崎市には、三島小学校に情緒障害の教室、広幡小学校に言語障害の教室がある。

通級指導教室で学ぶ子供は、通常学級に籍をおき、週あたり二〜四時間程度、指導教室で学ぶ学習形態である。

三島小学校の通級指導教室は、平成四年に開設され、現在に至っている。心の問題を抱える子供に、箱庭療法などのカウンセリングの手法を用いて、適応指導を図っている。

広幡小学校の通級指導教室は、平成十年に開設され、三年目を迎えている。吃音や、構音の未確立な子供へ指導をしている。週に一回、井田小学校へも言語の指導に行っている。愛知県には設置校36、40教室があり、そのうち6教室が中学校に設置されている。

通級指導教室は、軽度の障害のある子供に、適切な教育内容を提供できるよう設置されるものであり、増設の方向が今後の動きである。

配しなくていいんだよ」そんなメッセージを送りながら関わっていった。

将棋や卓球の腕が上がるにつれ、勝った喜びや負けた悔しさを表すようになった。自分から口を開くようにもなってきた。しかし、家庭のことを聞くと黙り込んでしまう。

彼と出会って半年ほどしたころ、彼は苦しいにやっとなやんとつぶやいた。

「お母さんは、僕のことをすぐに怒る。なぜだか分からない。きつと僕のことなんか嫌いなんだ！」と……。

母親に認められたくておどおどし、母親の顔を伺うあまりに、自分の判断で安心して口をきくことができなかつたのである。

母親とは何度も話の機会を持った。子育ての悩みや不安を抱えながらも、我が子のために一生懸命になっている母親。しかし、母親の思いと拓哉の受け止め方にずれがあると思えてならなかつた。思い切つて拓哉の言葉を伝えた。母親は絶句し、涙を浮かべて語り始めた。

「私は親に拒絶されて育つた。認めて欲しかった。我が子にはそんな思いをさせたくないと願つて育ててきた。しかし、知らず知らずのうちに同じことをしていたのか。」

母親の姿勢が変わつた。拓哉に過剰の期待をせず、「今のままのあなたで満足だよ」と全面的に受容するようになった。拓哉はかけがえない子であり、私は幸せであるとも語つた。

そして、拓哉も大きく変わった。表情が明るくなり、よくしゃべるようになった。在籍学級ではまだ十分に自己表現できないうえ、自分に少しづつ自信を持ち、友達の中に安心して飛び出そうとしている。



箱庭療法による心の表出と受容

行事に思う

美合小学校 校長 兼平 義文

特殊学級は、今でこそ複数設置校がありますが、しばらく前は単学級の学校がほとんどでした。そのため担任は一人職種のな動きとなり、互いに相談しながらの運営は、ほとんどできないのが実情でした。とりわけ、経験の浅い担任は、指導法はもとより、最も身に迫った「障害とは何か」の重要な問題を、手探りの状態の中で、自ら学習しなければならない状態が続きました。

「自ら学習」は、教師の本来あるべき姿ですが、書物での一般論では、「私の学級のA君、Bさんの効果的な指導はどうしたらいいだろうか」などの、今すぐ欲しい具体的な情報は得られません。試行錯誤の状態のなかで、「今の指導法でいいだろうか」と一人で悩むことも日常茶飯事でした。こうした悩みを解決する場の一つが、特殊教育の行事であったように思います。最近でこそ、研究発表会が増えましたが、当時は「特殊学級の授業研究会があったら、何人もの担任の悩みを解決できるのに…」と思ったものでした。

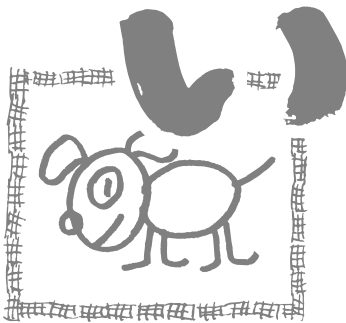
他校の児童生徒を直接観察する機会は、授業参観以外にはほとんどありません。その点、「運動会」「社会見学」「いも掘り会」「映画鑑賞会」「音楽鑑賞会」「事業所見学会」「クリスマス会」「なかよし合宿」などの特殊学級の行事は、他校の児童生徒の様子がわかる絶好の機会です。「うちの学級の子と、動きがよく似ているなあ」と、何か新発見をしたように思うこともありました。この観察をとおして、その学級の担任に指導法を尋ねたり、互いに情報交換ができるようにもなりました。こうした身近なやりとりが心の支えにもなっていました。

最近では、担任による「ブロック研修会」や「自主研究会」が開催されています。こうした会は印刷物を中心に話し合いますが、学級の児童生徒の話題になった時、行事での出会いがあったことで、より具体的にイメージ

化されます。その結果、活発で発展的な話し合いができて成果も期待できるようになりました。

行事は単に「児童生徒のための行事」だけの意味でなく、特殊教育担当者にとって、またとない研修の場でもあることに大きな意義があると思います。社会見学会は、大勢のライオンズクラブの方々と、看護婦さんが同行していただけます。学校の遠足と違って、大勢の目で守られた中なので安心さも倍増します。こうした中で、他校の児童と行動を共にする時、児童の言動が間近に伝わって来ます。自校の児童理解と同時に、他校の児童を知るチャンスとなっています。この機会をぜひ生かしたいものです。

今後もこの視点を忘れず、行事をより意義あるものに使いたいと思います。なお、特殊教育にかかわるすべての行事は、市当局や関係団体、保護者の方々の援助と協力あってこそ、可能であることも忘れてはならないことです。



生徒に学んだこと

東海中学校 森 雄一郎

長い四十日の夏休みが始まる。宿題はどうするのか？ 出校日は何日取るのか？ナスやトマトやハムスターの面倒はだれがどうやってみるのか？

今年度、新しく開設された我が八組にとつて、一学期の終業式前に解決するべき問題は、山積みだった。

学級当番や全校出校日もなく、かと言って毎日部活動で学校へ来るわけでもない。生徒がどうやってこの長い休みを過ごすのか。具体的なイメージがわからないまま「その日」がどんどん迫ってきた。

そこへ美川中より涙の出るほどうれしいお誘いが届いた。少年自然の家での野外活動と花火大会に参加しませんか、との話だった。一学期中は忙しさにかまけ、校外はもちろん

特殊教育部コラム

ブロック研修会について

平成十年度より、ブロック研修会がスタートした。特殊教育部を近隣の学校同士で七ブロックに分け、ブロック長において運営されている。

一ブロック・新香山中、岩津中、北中

岩津小、大樹寺小、大門小

二ブロック・葵中、城北中

井田小、広幡小、連尺小

三ブロック・甲山中、美川中、東海中

根石小、梅園小、美合小、生平小

男川小、山中小、本宿小、藤川小

四ブロック・竜海中、南中、三島小

六名小、竜美丘小、岡崎小、羽根小

五ブロック・竜南中、福岡中

緑丘小、上地小、福岡小

六ブロック・六ツ美中・六ツ美北中

六ツ美中部小、六ツ美南部小

六ツ美西部小、六ツ美北部小、城南小

七ブロック・矢作中、矢作北中

矢作東小、矢作北小、矢作南小

北野小（平成十三年度の場合）

校内での交流活動もままならなかった八組にとつては絶好の機会だった。

交流会は両日とも大変楽しく、また有意義な時間を過ごすことができた。ウッドバーニング製作や川遊び、安全な花火の扱い方など多くのことを体験することができたが、同時に多くの刺激も受けた。もちろん比較することではないが、美川中の生徒たちは実にチームワークよく行事に取り組む。役割分担がしつかりなされており、自分が楽しむだけでなく、一人一人が責任をもって係の仕事にあたり、参加者と楽しさを共有しようとする。また、初めて会うような人たちにも、気持ちのよい接し方ができる。そうした同学年の生徒たちの活躍ぶりを見て、我が八組の生徒たちも少なからず感じるころがあったようである。単なる「お客さん」としての参加の仕方ではなく、行事を運営する一員として積極的に他の生徒にかかわっていきこうとする姿が見られた。

ブロック交流会は教師が新しい視点や教材を得る場だけでなく、生徒にも校内では得がたい刺激を受ける場なのだと感じた。指導することよりも、同世代の生徒たちの様子と自分の今までの姿を見直す機会ともなるようである。

来年度は生徒と共に、招く側となって、楽しいブロック交流会を企画したい。



ウッドバーニングに挑戦

ブロック交流会

おかえしのおかえし

六ツ美南部小学校 栗本 喜代美

十月三十一日に、本校で研究発表会があった。全クラス公開授業、十一月には学習発表会も控えている。何をやるうか悩んだ末、人形劇の発表をすることにした。ブロックの他校の先生方のご協力により、ブロック交流会の形で研究会に参加することになった。

人形劇の題名は『おかえし』に決定。きつねとたぬきのやり取りが単純だけれどおもしろい話だ。登場人物も少なく、我がクラスにうつてつげだ。劇や物語に興味のない光一君や拓哉君が乗ってくるかどうか、根気のない秀明君が長続きするかどうか、心配事は尽きることがなかった。しかし、いざ練習を始めてみたら、「おかえしのおかえしのおかえしの…」フレーズに魅せられ、どの子も一日一時間の練習をコンスタントにこなせるではな

特殊教育部コラム

ブロック交流会について

平成十年度より、特殊教育担当者の研修会が、ブロックごとに行われようになった。ブロック交流会は、ブロック研修会で企画・立案された交流会である。時間的・距離的に近い学校の特殊学級で交流を行う。餅つきやクリスマス会・運動会応援練習などが内容である。

この交流会は、ブロック研修会が行われる以前より、企画実行されるところもあるが、ブロック研修会が計画・立案の場にもなり、年間での回数も多くなっている。特殊学級の少人数化もある面ではこの方法で解消され、ダイナミックな学習が展開でき、特殊学級の活性化につながっている。

いか。

練習中に、

「関先生、見に来てくれるかなあ。」

「六ツ美中部小の子たちも来てくれるの。」

など、ブロック交流会を楽しみにしているような言葉が出るようになってきた。大勢の前で発表する緊張感の中にも、ひそかな楽しみを見つけたようだ。

そして本番。教室の中には、六ツ美ブロック七校の児童、生徒、先生方、研究発表会に参加してくださった方々六十名程が、今か今かと始まりを待っている。

「今から、交流会を始めます。」

光一君のたどたどしいながらも大きな声で会が始まった。子供たちのドキドキが伝わってきた。

「これは、ほんのつまらないものですが、おかえしのおかえしのおかえし…」

いつまで続くか分からないこのやり取りに、集まった他校の子供たちが、たまらず、

「アハハハ。」

この笑い声と笑顔が、交流会の『おかえし』のおかえし。ありがとうございました。



人形劇の練習風景

もちつき大会たのしいな

福岡小学校 橋本 美智子

内田 登志江

秋の実りの日。

「先生、たくさんお米とれたね。」

と、うれしそうに子供たちの顔。

「みんなを呼んでもちつきしたいね。」

「早く、おもちが食べたいなあ。」

と、子供たちの弾んだ声が響いてくる。

福岡小では、ささやかながら三畳程の田んぼで毎年もち米を作っている。春、田おこし、しろかきとみんなで田んぼをならす。六月には泥んこになって田植えをする。七月八月、水やりや肥やりをし、苗の成長を見る。九月になると穂が出始め、だんだんと色づくが、穂が首をもたげたころ強い風が吹いて、子供たちの心配は尽きない。十月、たくさんのもち米の実をつけた稲をのこぎりがまで刈る。

特殊教育部コラム

追跡調査について

中学校特殊学級の進路指導は、卒業後の様子をつかまないと指導が上へだけになってしまふ。そこで、六十二年度、平成八年度に追跡調査を実施してきた。この調査により、特殊学級の子供たちが抱える将来の問題点、担当教師側の指導の反省点が見えてきた。昭和六十三年に設立した特殊学級進路指導委員会の基本的な方向もこの調査から導き出された。

この調査から、職場定着率は中学生全体より上であるものの、個別に見ると特殊学級卒業生の離職する状況は、周りの障害に対する理解で回避できるものも少なくなかった。また、進学後の就職の難しさも抱えていて、調査の際に相談窓口になることもあった。この結果から、卒業後へのアフターケアの必要性は明確になった。



額に汗して全部の稲刈りをすませ、稲を干し、乾いたところで脱穀である。学区の方から寄贈して頂いたせんばこきの刃と、家から持ってきたざるを使って、お米の粒を取っていく。大変な作業だが、子供たちは黙々と仕事をこなし、最後にもみすり・精米を終え、やっともち米になった。こうして自分たちが作ったお米をもとに、さあ、もちつきである。今までもちつきは、福岡小学校の特殊学級だけで行ってきたが、たくさんの子と一緒に楽しいこと、他の学校の特殊学級のお友達と仲良くなれること、みんなで良い経験ができることなどの願いから、昨年度より、上地小・緑丘小・福岡中・竜南中の子供たち・先生・家の人たちを招待し、ブロック交流会としてもちつきをするようになった。わが校では、校長先生はじめ学級担任外の先生たちが、火起こし・米蒸し・もちつきなどを手伝ってください。また、子供たちで、山の学習の経験のある子は、まき割りや火をくべることも一緒にする。

もちつきの日、待っていたみんながたくさん集まった。「おはようございます。」のあいさつにも力がこもる。それぞれの学校で簡単な自己紹介をしてから、いよいよもちつきの始まり。さすが、中学生。杵を持つ手もたくましく、ドツスンドツスンと音がする。小学生は子供用の小さい杵で、ペタンペタンとかわいい音をさせる。初めてもちつきをする子も一生懸命頑張った。勢いよくつき上がったおもちを、今度はみんなで丸めてこねて、でき上がり。あんこもち・きな粉もち・しょうゆもち・ポテトチップスもち・大根おろしもちとたくさんのおもちをいっぱい食べた。とびきりの笑顔あふれる会になった。



ペタンもちつき

「運動会」を楽しもう

美合小学校 安藤 仁史

「これではできない子がいる」「その案はこちらの演技に対象をかえた方がいい」などと容赦なく言われると、「このー、せつかく考えたのに。人の苦勞も知らんで…。」と思います。これは子どもと親の集い運動会の演技の内容を検討する会での、かつての私が味わった気持ちのひとつです。

私が担当してきた「器具演技係」というのは、演技の立案から製作、運動会当日の器具の出し入れや進行を受け持ちます。五月の中旬、器具演技係が全員集まり、それぞれの責任者が考えてきた演技の案一つひとつについて、検討していきます。他の人に見てもらったことで、自分ではけっこういいと思っていた案でも、前述のように、おもしろみがないとか難しいなど、けっこうズバズバと指摘され

特殊教育部コラム

子どもと親の集い運動会について

昭和五十七年、「子どもと親の集い」を少年自然の家で実施した。宿泊での会であった。翌年から、この運動会が開催されるようになった。

平成十二年度の参加者は、子供二二七名、保護者一八六名、来賓および関係者、八十名であった。毎年、岡崎ライオンズクラブから、参加賞の寄贈があるなど、子供たちの楽しみになっている会である。

昭和六十三年より、運動会の歌を特殊教育部で自作し歌い始めた。体操や競技内容を子供の実態に合わせ、参加意欲を高める工夫をこらした。また、平成六年より、保護者の競技への協力依頼をし、文字通り、「子どもと親の集い」になる運動会となった。「巻末資料参照」

ます。というのも、子どもと親の集い運動会は、本番当日のみ一同が会するので、参加する子供も大人も、本番で演技の内容がすぐに分かって、安全に楽しめなくてはならないからです。また、いくら楽しそうでも、所定の時間内に収まらなければなりません。参加する子供たちの年齢の幅はあるし、障害の種類や程度もさまざまです。必要な条件を満たすように立案するのは容易なことではありません。でも自分のアイデアが形になり、みんながその演技を楽しんでくれたときは痛快です。そのためにその年の流行や話題、人気キヤラクターを駆使して、せっせとアイデアを練るのです。検討会では弱点を指摘されてシヨックも受けますが、大切なのは作者のプライドよりも参加する子供たちなのですから。それだけ自分の考えが未熟だったと思うしありません。夏休みの器具の制作会には、市内の多くの特殊学級担任が応援にかけつけてくれます。そして子供たちが危険のないよう



平成4年度運動会より「逃げろ！」

に楽しく参加できるように、わいわいとアイデアを出し合いながら作っていきます。子どもと親の集い運動会は、大勢の人の手と知恵によって創り上げていく運動会です。

仕事のあり方

美川中学校 山口 博正

中学校の特殊教育部の大きな行事の一つに、事業所見学会がある。これは、岡崎市内の事業所や工場を見学する行事だ。見学することによって、卒業後の進路や勤労について見つめ直すことをねらいとする。

市内の中学生が一斉に集まるので、工場見学だけでなく、生徒が一堂に集まり交流する場も設定した。

平成十一年度は、午前中ボウリング大会を行った。エールボウルのいくつかのレーンを借りて行った。ボウリングのうまい人もいれば、初心者もいたが、どの生徒もとてもよく楽しめたようだった。この大会を通してまたボウリングをやってみたいと考えた生徒が多かったので、余暇の過ごし方を考えるよいきっかけとなった。

特殊教育部コラム

事業所見学会について

この見学会は、施設見学会同様、中学校特級学級進路指導委員会の設立に伴い、年間計画に位置付けられた。設立前は、夏休みに担当教師のみによる自主研修として事業所の見学会を行ってきた。子供へも職業自立を具体的に意識付けられる場として、重要な会になっている。

この会には、保護者、担当教師が、子供の将来を設計する学習の機会として、講演会も計画されている。(巻末資料参照) また、中学校特級学級の生徒が一堂に会する機会ともとらえ、交流会も計画されている。他の中学校卒業生がどのような進路を選択していくのか、交流会の中で紹介したり、ゲームを楽しんで親睦を図る会にもなっている。

見学する事業所は、ここ数年、各中学校卒業生の勤務する事業所を見学し、「より身近な事業所の見学先を」という保護者からの要望にこたえるようにしている。これは、勤めをする卒業生を上げまし、卒業生の職場定着を図るといふ利点もある。

昼食後、葵カメラを見学した。葵カメラは額田郡幸田町に位置し、以前はカメラを製造していたが、今では、電気・電子部品を製造している。

最初に工場の中を見学した。作業の様子は、非常に静かで無言で仕事に取り組んでいた。細かい作業に真剣に取り組む姿に感動した生徒もいた。

その次に、タイムレコーダーを見せてくれた。タイムレコーダーがタイムカードに正確に出勤・退出時間を記録する様子を見せることで、時間を守ることの大切さを実感することができた。また、遅刻を何回かすると、一日分の給料が減らされる話を聞くにつれ、今までの生活を振り返って、学校生活で遅刻したことを反省する生徒もいた。

それから会議室で質疑応答を行った。会社で好まれる人間についての質問があり、それに対して以下の回答が得られた。会社で好まれる人間は、素直な人、積極的な人、

周りの人と協力して常に会社のために考えて行動する人であった。これらの要素は会社だけでなく、今の学校生活においても身につけなければならない要素でもある。今の中学校生活と比較して、現在の自分に今から何をしなければならぬかを見つめ直した生徒もいた。

事業所見

学会は、このように仕事のあり方を考えた
り、今の生活態度を見つめ直すこともよいきっかけとなった。



説明を真剣に聞き入る生徒たち

緊張と笑顔

竜南中学校 大柿 峰樹

中学校特殊学級の大きな行事「事業所見学会」では、午前中は生徒の交流会、午後は各学校ごとに事業所の見学を行った。

平成十二年度の交流会は、市内の中学生がすべて集まって、学級紹介や三年生の進路についての報告、学級発表、ゲームを行った。プログラムにしたがって、各学校の生徒が舞台の上にあがり、学級の様子や自己紹介をしていく。各自が原稿を作って、事前に学校で練習をしてきたことを、みんなの前で発表していく。他校の発表を聞きながらも、舞台の下では自分たちの発表を心配しながら何度も原稿を読み返す生徒たち。「心配だな。緊張する。」などつつぶやきながら、自分たちの順番を待っている。舞台上上がり、発表が始まる。練習どおりになかなかうまくはいかな

特殊教育部コラム

施設見学会について

中学校特殊学級進路指導委員会が、設置され、それまで、学校ごとに行ってきた施設見学会が、年間の活動計画に位置付けられるようになった。この見学会は、春日井市にある知的障害者のための「春日台職業訓練校」を主な見学先として、例年七月上旬を見学期として見学している。（巻末、資料参照）また、この会は教育相談会をかねており、三年生の進路先の一つを見学し、具体的な情報を得ようとするものである。特殊学級の経験の少ない教師にとっても、他校生徒の情報や教師間の情報交換もでき、有意義な場になっている。

春日台職業訓練校は、木工、機械、縫製、紙器製造、陶芸に分かれ、それぞれの分野別にその技能を学ぶだけでなく、一年間の寮生活により、職業意識の向上を図る場所である。一年後の子供の成長、寮生活における子供の適正などを考慮した入学選考がある。（進路指導委員会の作成した「特殊学級進路指導の手引きCD」を参照）

いが、担任の先生が別の担当でその場にい
ないこともあり、学級の中で助け合いながら必
死に発表を続けていく。発表が終わると、ほ
つとした顔をして、みんなが笑顔になる。ぎ
こちない発表ではあるが、生徒一人一人が真
剣に発表し、それを温かい気持ちで聞してい
る生徒たち。ゆったりとした時間の中に、緊
張感が漂うとてもよい交流会だった。

午後の事業所見学会では、岡崎給食に見学
に行つた。クラスの生徒の実態から見学する
には最適ではないかと考え、見学先に選んだ。
社長さんも従業員さんもとても親切で、生徒
たちにていねいに説明をしながら案内をして
くださった。弁当の味噌汁を作る仕事では、
大量のネギを切るところを見せていただき、
生徒たちはすごいと言いつつと見つめ
ていた。そうすると、従業員の女の方が、
「もっとすごいところを見せてあげよう。」と
言つて、機械でねぎを細かく切るところを見
せてくれた。生徒たちは、驚いたような顔を

して、じつと見つめていた。見学後のお話の
中では、従業員の中にも障害者の方がみえる
ので、障害をもっている生徒でも職場体験や
職場実習を受けていただけること、クラスの
三人の生徒でも十分働けそうな気がするとい
うことを社長さんにおっしゃっていただい
た。障害者にも温かい気持ちで接しながら、
会社を経営されている姿にとても感心させら
れた。こういう会社があるなら、自分が担任
している生徒たちも、将来きつと就職するこ
とができるだろうと希望を与えられた一日だ
った。



「六斗目川のパズルを楽しむ」

ぼくの字が載ってるよ

六ツ美西部小 吉田 里美

「今日は、『か・い・は・つ』という字を書くよ。」

ある日の書写の時間、いつもの習字の筆ではなく、絵筆を持たせて、字の練習に取り組ませた。

特殊教育部広報委員会より、機関紙『かいはつ』の表紙の文字の依頼があり、わが校の子供の作品を載せるという。文字は、ひらがなであるので、二年生の隆君も五年生の宏明君も取り組むことができる。

「今日はね、新聞の題の字を書くんだよ。一生懸命書いた子の字が、選ばれて載るからみんな頑張ろうね。」

そんな励ましの言葉をかけながら。

機関紙『かいはつ』は、学校関係者だけでなく、特殊学級に在籍する子供たちの各家庭

特殊教育部コラム

広報誌「かいはつ」について

昭和五十四年に発行を開始し、年間二回発行、現在、第四十四号を数える。

内容は、部長巻頭文、タイムリーな特集記事、児童・生徒の作文、作品、詩、特殊学級担当者の思いを載せた作文、研修報告、表彰関係などである。

配布先は、全市小中学校職員、特殊学級在籍家庭、特殊教育関係機関である。（巻末資料参照、記載内容一覧表）



かいはつ第1号・昭和54年12月1日発行

にも配られている。それだけに、選ばれて自分の字が、新聞に載るということは、大きな自信にもつながる。

今日の授業は、いつもになく静かだ。

中でも、五年生の宏明君の姿勢がいつも以上にいい。

宏明君は、自分で習字には、ちょっと自信を持っている。普段の書写の授業でも自分の納得のいく字が書けるまで、真剣に取り組むことができる。

「先生、この字は、どうかなあ。」

私の反応を気にかけている目は、自信にあふれていた。

「いいねえ。さすが宏明君だね。」

「宏明君上手。やっぱり、宏明君が選ばれるな。」

友達の言葉にもはにかみながらも、ぼくが選ばれるんだという自信が見られる。

数日後、機関紙ができてきた。

子供たちに機関紙を配布すると、

「やったあ。」

宏明君の第一声。自分の名前を見つけたからだ。

次の日、宏明君の母親から、

「先生、もし、まだ余分がありましたらいただけますか。」

と、手紙が届いた。早速、広報委員の方に連絡をとり、余分に数部送っていた。

親にとっても、自分の子が認められた時なのだろう。



真剣に取り組む宏明

水を得た魚

井田小学校 内田 純子

隆君は、通常学級の中では、おとなしくあまり自己表現をしない子であった。授業中、手を挙げることはほとんどなく、おどおどした面が多く見られた。発音の似たひらがなを混同してとらえるために、文章表現すると意味不明なことがよくあった。そのため、三年生のとき、ティームティーチングの先生から個別指導を週二回受けていた。個別に見ていくと言語だけでなくその他の学力も付けてあげる必要を感じた。

幸いなことに、隆君が四年生になると、本校で通級指導教室が始まった。時間をかけ、伸ばしてあげたいという親の希望から、週二回の通級の指導を受けることになった。子供の足りない力や、つまづきを克明に分析し、今できることの上に積み上げていくことで、

特殊教育部コラム

就学指導委員会について

この委員会は、円滑な就学が子供に保証されることを目的として、相談活動をしている。昭和五十年にこの委員会が設置されるまでは、特殊教育研究協議会が、市内の就学に関する業務を行ってきた。

この研究協議会は、市内の児童生徒の実態調査をまとめ、入級別法の検討をし、記録用紙の作成をした。また、行動類型チェックリストも開発した。

現在、特殊教育部には、この委員会に、協力委員として、園児観察、補助、記録などにたずさわっている部員もいる。

平成六年より、「そよかぜ相談室」の開設により、相談窓口常設の一步を記した。

隆君の姿が変わっていった。

通級に参加していることから特殊学級の社会見学に参加する機会があった。五・六組の子供たちと楽しそうに生き生きと活動する姿が見られた。通常学級の中で自分を押さえた活動が多く見られた隆君にとって、楽しいひとときであつたらしい。その後、五・六組の行事のクリスマス会、お別れ登山にも一緒に参加することがあつた。三学期からは、通級指導を個別指導から五・六組への体験入級という形で合同指導へと変えてみた。

このような活動の中で、隆君の生き生きと活動する姿を連絡帳でくわしく知らせるようになった。母親との意見の交換の中から次のような手紙をいただいた。「隆が楽しく過ごせる学級が一番良いかもしれません。この子の実態をどう受けとめればいいのかいろいろ悩みました。でも、この子が過ごしやすい場所が一番良いと分かりました。」

子供の変化の事実をありのままに親に伝え



楽しく5、6組の子と過ごす隆君

ることが、子供にとってふさわしい就学の間を提供することになると感じた。

隆君は次の学年に五・六組に入級することになった。学級の中で最上学年になり、下学年の子を指導する立場になり、今では立派な我がクラスのリーダーである。

相談活動を通して

広幡小学校 鳥井 裕之

「ぜひ、地元の学校に通わせたいですが、どうでしょうか。」と、保護者。

「この子にとって、力が一番伸ばせる教育環境を一緒に考えましょう。」と、相談員。

就学についての常設の相談窓口『そよかぜ相談室』でのやりとりである。この相談会は、子供に障害があるなどで、来年度小学校等へ入学するのの際し、悩みを持っている保護者が申し込んで行うものである。

「将来は、地域で生きていくことを考えると、地元の子供たちと一緒に学校生活をおくることで、うちの子を知ってもらうことが一番大切ではないかと考えています。」

「この子が将来、社会自立するためには、少しでもできることを増やしていきたい。そのためには、専門の教育を受けた方がよいので

特殊教育部コラム

「そよかぜ」相談室について

岡崎市就学指導委員会は保護者との面談を以前から行っていた。その中で、気軽に相談できる場所がほしいという要望が多くあった。就学指導委員会としても、より多くの方と面談することで、就学指導に対する理解を広めていけたらとの願いがあった。

双方の願いをかなえる形で平成六年度より、『そよかぜ相談室』が開設された。さらに平成十年度から教育研究所内に受付窓口、平成十一年度からは教育相談室を常設していた。ただ、相談を続けてきている。『そよかぜ相談室』は、就学についての悩みを持つ保護者から申し込んでいただき、就学指導委員会の委員や協力員が相談にあたっている。

今後は、担当相談員を中心に対応することで、常時相談が可能となる。在学児についても相談を受け付けているので、相談の必要な保護者への啓発をしていきたい。

はないかとも考えています。」

「養護学校や特殊学級のことがよくわからな
いんです。この子にとって一番向いているの
はどこなんでしょうか。」

など、保護者にとって切実な問題として、い
ろいろな悩みが出される。その中でもよく出
される意見の中に

「多くの子たちと一緒に生活することで、刺
激を受けて伸ばしたい。」

というものがある。

「障害の程度や個の特性から、刺激を受ける
のに適正な集団の大きさがある。ただ大きい
集団に入れば刺激を受けるといってもな
い。大きな集団に入ってしまうと、萎縮して
しまったり、適応できなかつたりする場合が
ある。この子にとって一番適したところをみ
つけましょう。」と、何度も相談すること
もしばしばである。

これらの相談活動を通じて、最もうれしい
のは、

「ずうっと悩んだ末に、先生たちの意見を聞
いて養護学校に決めて、今は本当によかった
と感じています。」などの保護者の方からお
話をうかがったり、学校訪問を通して、相談
にかかった子供たちが生き生きと学習し生活

している姿
に触れたり
したときで
ある。

これから
も、一人で
も多くの子
が楽しく学
校生活がお
くれるよう
に、相談を
充実してい
きたいもの
だと考えて
いる。



平成5年 市就学指導委員会

特殊と通常のはざままで

美川中学校 石丸 実智代

翔君は、人なつこくて、情があつて、生き物が大好きで、体を動かす活動なら人が嫌がることでも進んでやる子である。しかし…。

小学一年生の翔君は、授業中でも席に着いていることがなく、配膳台の下にもぐっていた。小学二年生の翔君は、通学途中にお姉ちゃんといけんかした衝動で、車道に飛び出した。小学三年生の翔君は、友達といけんかして「死んでやる」とペランダから飛び降りようとした。小学四年生の翔君は、バスケットボール部に入ったけれど、三日続けて練習に参加したことはなかった。小学五年生の翔君は、学芸会のプログラムがすべて終わった締めくくりのあいさつの場面で、グランドピアノの鍵盤をたたいて鳴らした。小学六年生の翔君は、始業式の日を忘れていて、家に電話をしたら

特殊教育部コラム

A D H D について

注意欠陥多動性障害を A D H D と英語の頭文字を取って言う。知的には、遅れはないものの、集中する力に欠け、周りの子供たちとの関わりや授業で、特異な行動をする子供である。(知的な遅れをあわせもっている子もいる)

いろいろな表れがあるが、いつまでも文字が読めなかったり、国語は出来るのに算数はさっぱりだったり、成績はよいけど遊びやスポーツのルールが理解できなかったり、みんなと遊べなかったり、通常の子供と違ったアンバランスな面が見られる。

このような子供たちは、それまでの体験から、自己の評価価値が低くなりがちで、出来ることのあるのに消極的になる傾向も見られる。まずは、子供に合った学習の仕方を開発し、自己評価が正しく出来るように援助することである。一人一人違った対応でないと効果はあまりない。疑われる場合、専門機関での指導への助言を得ることも大切である。

まだ寝ていた。

そんなふうに、翔君は「ちょっと変わった子」として目立っていた。五年生で彼を受け持ったとき、五年生にしては並外れて幼い面も持ち合わせている翔君に、どう対応したらよいかかなり戸惑った。手さぐりしながら一緒に過ごすうちに、学校の勉強は定着していないが、非常に回転の速い頭のいい子だということの方が分かってきた。大人が使うような言い回しを、正しい用法で交えながら会話のできる子だった。けれども、通常の学級のペースでは生活・学習できないのだから、別に翔君のためのプログラムや支援が必要だった。

翔君は中学入学と同時に特殊（情緒障害）学級に入級し、現在二年生である。私自身も彼の入学と同時に異動、再び翔君の担任である。この二年間、翔君は特殊教育の支援を受け、かなり落ち着いていた学校生活を送っている。彼の実態に合ったペースで、段階に応じた学習課題に取り組み、もともと体験・作業学習

を好む子であったので、そこで良さを認められる場面も増えた。そうして自信が持てるようになってくると、将来自立して生きるために必要なこととして指導した、宿題の継続や時間を厳守することの約束事も徹底されてきている。

問題は今後である。翔君は知的障害ではない。それどころか知能は平均以上である。しかし、その実態は通常の土俵では到底難しい。「特殊と通常のはざまの子」と考えられる。

そういう子は、案外身近にたくさんいるのではないだろうか。彼らこそ、特別な教育的支援を必要としているのではないだろうか。



おかざきっ子展の準備中だよ。翔君

自主研修会

わたしが講師？

竜海中学校 武田 正道

平成四年冬休み、本宿にあった「働く者の家」で特殊教育部自主宿泊研修会が開かれた。竜南中学校の大柿先生を執行委員長に、講師を特殊教育部で固めた研修会である。当時、特殊学級を担当されていた故柴田九二男先生の強力なバックアップで開かれた会である。福岡小学校蜂須賀先生の「生活単元学習と系統的な学習」矢作北中学校木河先生の「脳と認知・学習」井田小学校安藤先生の「レクリエーション指導」井田小学校加藤先生の「手話と歌」の講座が夕方まで続いた。夜は、岩津中学校坂田先生の「究極のラーメン講座」、竜南中大柿先生の「なべ奉行講座」、おなかがいっぱいになったところで、夕食後、特殊教育部部长磯谷先生の講座「研修のあり方」が行われた。

特殊教育部コラム

自主研修について

自主研修会は、特殊教育部設立時からその精神が芽生えている。特殊教育自体が自己研修といつてよく、部の活動も研修と表裏一体となっている。外部講師を依頼し、最新の指導法を学習したり、内部で得意な分野の情報交換をしたりしている。

(巻末に過去に実施した宿泊自主研修を一部紹介)



平成4年自主研修・手話講座

蜂須賀先生は、生活単元で、季節の単元などを扱い、子供に興味を持たせることは、教師の準備である程度の成功が予測されるが、子供にとって、系統性が押さえられているかという問題提起をされた。

木河先生は、大学時代の専門から、「学習を脳レベルで捕らえなおす」興味深い話があった。

加藤先生は技能習得の力を発揮され、「トトコの歌に合わせ、手話をする」という子供にも取り付きやすい、手話講座であった。

安藤先生は、子供の心をとらえるゲームを実践で紹介された。体を使った楽しい時間になった。

そして、夕食をかねた坂田先生・大柿先生の講座と続いた。坂田先生は、学級の子供たちにもこの生活単元学習を指導していて、講座は、盛り上がっていった。

磯谷部長の「自己研修のあり方」講座は、大学時代、地学教授に同行した隠岐での実地

調査活動と教職に着かれてからの研修をダブルさせて、中身の濃い、これからの研修のあり方を提示された講座であった。

この研修会は、特殊教育部の個々の力量を再確認する実りある研修会になったと思う。突然の講師依頼に「えっ、わたしが講師？」と、驚きはしたものの、それぞれの経験・技量を発揮された。

このような研修の場・精神は、現在、特殊教育部ブロック研修会、教材教具開発サークル、個別の指導計画自主研究会につながっているとと思う。九二男先生の言葉「楽しくなくちやいかん。やるからにはきちんと。後は俺がみる。」は、今も特殊教育部に生きている。

総学が始まる

広幡小学校 鈴木 明美

「生活単元学習（以下生単）」と総合的な学習（以下総学）はどう違うのか」について、二〇〇〇年度県教研「障害児教育分科会」では、活発な論議がなされた。

新しい教育課程の花形ともいえる総学。特殊教育も通常の教育課程に準じて取り組むことが望ましいとされたのを受け、今年度は、総学としての実践が多数発表された。

生単としての畑作りの成果を、子供達がデジタルカメラ・パソコンを駆使して、家族や協力学級の仲間など身近な人達に知らせるといった実践あり。町探検を通して、町の商店街の人々との交流が深まり、息の長い交流が続いている実践あり。岡崎からも、宿泊学習を生徒たちが企画・運営していくことで、人と接する力を育てていく実践が報告された。

特殊教育部コラム

東海北陸地区・研究発表大会

平成三年、岡崎において、東海北陸地区特殊教育研究発表大会が開催された。会場は、一日目が全体会を市民会館、二日目の分科会を竜美丘会館であった。会場係、駐車場係、接待などに特殊教育部員が活躍した。

全体会では、愛知県の特教育の現状報告に続き、小椋教諭（連尺小、当時）・田島教諭（美川中、当時）が、岡崎地区の取り組みを報告した。発表後、甲山中・葵中の特殊教育級の生徒が、ハンドベルの合同演奏をし、大きな拍手に包まれた。

大会二日目、進路指導部会で、木河教諭〔矢作北中、当時〕が、「一人ひとりの生きる力を育てる作業学習と進路指導について」というテーマで実践報告し、作業学習の取り組みとともに、特殊教育級進路指導委員会の先進的な取り組みも紹介した。

しかし、これまでの生単と総学とはどこが違うのだろうか。教科の枠を越えて、身の回りの事象に生き生きと関わっていく子供達の姿に、大きな違いは感じられない。

「生単と総学をことさらに区別する必要はないのでは。」

「生活上の課題を持つものが生単で、あてはまらないものが総学なのは。」

「生活での取り組みを通して生きる力をつけるのが生単で、物事の調べ方や人との接し方を身につけていくのが総学なのは。」など。

生単と総学との違いについて、各地区での実践をもとに数多くの意見が出された。

助言者の先生からは、

「生単は生活上の課題を処理していくために教科・領域を合わせて行う。ところが従来の教科・領域では、教師の意図が入りすぎることもあった。その反省から、総学は自ら問題を見つけ解決する力や創造的な態度を育てることがねらいとなった。」

との助言がなされた。総学と生単は、内容や方法に大きな違いがあるわけではなく、ねらいが違うということらしい。あれこれ悩むより、まずは思いきって、子供たちが主体的に関われる、ダイナミックな活動に取り組みでみるのが大切という結論に落ち着いた。

県教研での実践発表をいくつか聞くうちに、市教研で発表された数々の実践も決して引けを取らぬものだと思えて実感した。本年度の市教研では、総学としての実践レポートが多数寄せられることを願う。



せんべいを使った舌の機能訓練

すばらしい人に囲まれ

六ツ美中学校 岡田 幸夫

十一月八・九・十日に、全日本特殊教育研究連盟全国大会(高知大会)に『情緒障害児学級の教育』分科会の提案者として参加する機会をいただいた。しかし、大会の雰囲気を変えなければという責任感からか、(初めての四国だ。坂本竜馬が…、かつおのたたきが…、僕を待っている。)という気にもなれず、何となく気が重かった。それに拍車をかけたのが、プロペラ機。少しの気流の乱れで揺れ、そのたびに気がめいっていった。そんな私の気持ちとはうらはらに、プロペラ機は軽快な(??)飛行を続け、高知空港に無事着陸した。研究発表、基調報告、記念講演、公開授業とすすみ、いよいよ分科会。本分科会のテーマは、『豊かな生活を目指す情緒障害児の指導』であり、『人とのよりよいかかわりの姿

特殊教育部コラム

第39回全日本特殊教育研究連盟全国大会

第一の提案は、愛知県岡崎市立六ツ美中学校教諭岡田先生の「人とのよりよいかかわりの姿を求めて」であった。集中が持続せず、自分本意で乱暴な言葉遣いをするA君、引っこ込み思案で気持ちがあまく伝えられないB君を取り上げ、次の仮説に基づいた実践報告があった。仮説一「社会科の授業で、クイズ形式の学習、パソコンを使った一人調べ、カルタ作りによるまとめなどの工夫により、達成感や満足感などが感じられ、落ち着いた気持ちで生活でき、自分の力を十分に発揮したり、自分に自身が持てるようになるだろう。」…その結果、A君は活動に集中して取り組み、自分本意の行動を控えて小学生に教えようとしたこと、B君はパソコンで調べたプリントを用いて自信をもって発表することができ、自分の気持ちに負けないで関わることができたことが示された。(全日本特殊教育研究連盟機関紙「発達の遅れと教育」より)

テ ー マ	提 案 者
人とのかかわりを全校へ・地域へと広げる交流活動と体験活動	徳島県鳴門市立神明小学校 濱本 和湖先生
体験学習を生かした不登校の子どもへの支援のあり方について	高知県高知市立介良中学校 塩田 文範先生

を求めて』という私の他に、資料のような二つの提案があった。

その中で、濱本先生の実践を述べようと思う。総合的な学習の時間及び生活科における『アワーあきのみ』や、特殊学級啓発のための出前授業（先生がつけられた名前）の実践報告があった。協力学級の子たちと一緒に学区を探検する中で、生き生きと活動したり、協力学級の子や地域の人たちとの交流が深まったりしたとの話があった。また、具体的なもの（例えば、特殊学級の子が書いた習字）を教材として、がんばる姿を全校児童へ伝える出前授業の話があった。

レポートの最後にあった「障害がある子ども

もが社会的に自立するためには、人に恵まれるということが、どんなに大切であり、幸せであるかということ…」が心に残った。

ふと自分のまわりを見つめ直してみると、学級の生徒も私もすばらしい人たちに囲まれて生活していることに改めて気がつかされた。その夜のかつおのたたきの味は、最高であった。そして、帰りのプロペラ機の揺れさえとても心地よいものであった。



「玉入れ」

ヨウコからの手紙

福岡中学校 稲垣 繁美

新年度が始まって間もなくであった。ヨウコから封書が届いた。名前は中学校時代そのままであったが、住所が藤川町に変わっていた。どうしたのだろうと封を切ると生まれたばかりの赤ちゃんの写真が同封されていた。

そして手紙には「繁美先生お元気ですか。私も元気です。好きな人ができました。子どもができました。いまツヨシと仕事をしている人の子どもです。お母さんにないしょにしてたけどはなしました。」とあった。すわ、未婚の母かと心配しながら先を読むと「ことしせきをいれてもらいました。まえばなかなかいれてもらえずつらかったです。だんなさんはタケシといます。五人兄弟のすえっこです。お母さんもいます。やさしいお母さんです。うちの人もとてもやさしくしてくれま

特殊教育部コラム

進路指導アンケートについて

進路指導委員会で会の方向性を探る資料として、平成五年度、平成十年度の二回、アンケート調査を行った。

このアンケートは、進路指導委員会に対する希望・要望、卒業期における進路指導のあり方を、本人、保護者へ問うものである。

アンケート結果から、保護者は強く将来に不安を抱いていて、自立への本人の成長を願い、援助機関の確立を望んでいた。卒業生は、余暇の過ごし方で、友人とのかかわりが希薄になり、生活の意欲の面で、職場定着以外にも問題を抱えていることが伺えた。



す。」とあり、ほっとする。特殊教育に携わって十数年、教え子から子供が生まれたと聞いたのは初めてであった。いろいろあったらしいが、今は姑さんにも恵まれ幸せそうだ。

私はそんな彼女にお祝いがたくて、封筒の住所を頼りに女の子用のワンピースを贈った。フリルのついたピンクのワンピースだ。間もなくヨウコからお礼の電話が入った。それからしばらくしてだんなさんの仕事で安城まで来たので私の家へ寄るといふ。「家は分かるの？」と聞くと、「大丈夫」ということでそれから程なくして、だんなさんの運転するワゴン車に乗って親子三人、そして弟のツヨシも一緒にやってきた。いかにもやさしそうなだんなさんと髪の毛がくるくるとカールしたかわいい女の子であった。一緒に来た弟のツヨシのことは手紙に「仕事をしません。でも、やすまさんがばって仕事にうちの人のいってます。」と書いてあったが、一応仕事はしているようで、ほっとする。

ヨウコからの手紙は「城北中のどうそつ会をやりたいと思ってます。まだひにちはきまつてません。けどきまりましたら、れんらくをします。」と結んであった。

城北中学校の卒業生も、みんないわゆる結婚適齢期になっている。一人一人の顔を思い浮かべながら、ヨウコのように結婚して自分の子供を持つ、そんな幸せを味わってほしいと思った。



卒業証書授与

三月になると

六ツ美北中学校 蜂須賀 隆

ほつとする時期。それは中学三年生全員の進路先が決定し、合格証や採用通知書が届いた時です。特に、進路先について保護者の意向や生徒の意識が何度も変わり、そのたびに話し合いを持ち、進路予定先と相談会を行い、教師にとっては「大変」と感じられた年の三月は、本当にほつとします。

しかし、卒業後数か月がたち、職場や学校生活がきちんと送れているかどうかを尋ねると、辞めてしまったと聞く場合もあります。

残念な結果を聞いた時には、「本当にこの進路先で良かったのだろうか」と考えさせられてしまいます。他中学から話を聞くと、家から一歩も出ることできなくなってしまうたり、家庭訪問をしても会ってもらえなかったりする場合もあるようです。

特殊教育部コラム

過去の「かいはつ」原稿より
「いつも思(こ)う」と」

盆前の日曜日、卒業以来何年ぶりかのK君が訪れる。すしをつまみながら、小学校当時を語り合う。…中学を出てから鉄工関係の会社に入り、そこを振り出しに三回転職し、今は大工として働いているそうだ。物を拾ってきたのは何かしら製作しては満足していたK君にとっては一番びつたりの職場である。

他の子供たちにも、もつとやってやらなければならぬことはないだろうか。中学を卒業してすぐ職場で働けるようなシステムも考えていく必要があるのではないだろうか。その子の適性に合わせた職業実習をやるなり学校での作業訓練をするなり、色々と考えられると思う。K君の訪問を機に、もつと子供の実態を見つめ、生きるための基盤について考えてやらなければいけないと思う。

かいはつ十四号（昭和六十年十二月）男川小 鈴木滋先生

ですが、大多数の卒業生は、それぞれの進路先で元気に過ごしています。時には中学校へ遊びに来て、現在の学校生活の様子などを話してくれます。このような場合は、「私たちが行ってきた進路指導でよかったのだ」と嬉しくなります。

特殊学級進路指導委員会では、生徒個々の進路に関わる様々な問題について、意見の交換や検討をしています。委員会の行事である事業所見学会や春日台見学会は、大きな情報源です。そして、教師にとって一番役立つことは、進路先についての情報交換です。

「その子の状態に合った進路先は?」「家庭状況から判断すると、将来的に福祉の援助を受けた方がよいのか」「反対に就労の道を探るのか」「進路先(進学・就労)の実態にその子が耐えていけるのか」などを、他中学校の教師の体験談や様々な立場の方から情報を得て、一つの資料として大いに参考としています。

最終的には、保護者や生徒の気持ちを大切に考えています。進路先の資料や中学校生活での様子を保護者に伝えながら、無理なく共によりよい進路先を考えていくことが必要だと感じるこの頃です。



卒業生を囲んでのバーベキュー会

雑感・・・生活単元学習と総合学習の発足

秦梨小学校 校長 鈴木 忍

特殊教育には「生活単元学習」という単元構成の授業がある。精神的に未発達、未分化の状態の子供たちを教えるのに、それぞれ独立した教科を系統的に教えても、あまり意味がない。理解できない。ということで、教科も生活指導も、行事も、すべてひつくるめて生活経験を中心に指導していく。

今では特殊教育にだけ見られる特殊なスタイルのように感じられるが、もともとの由来は違ふ。

戦後の一時期、経験主義教育論がもてはやされた頃には、通常の教育で、生活経験重視の指導を「生活単元学習」と呼んでいたようである。知育に偏りすぎた教育の反省から、もつと経験を重視した教育をし、頭でつかちの子供ができてしまわないよう、生活に立脚した授業を構成するべきであるという新教育の流れが日本を席卷した。振り子が、系統的な学習から経験重視の学習に大きく振れた時期だ。どこか今の教育状況に似たところもある。

その後、「這い回る社会科」に象徴されるような生活主義に対する批判や、水道方式の遠山啓先生の運動で、昭和三十五年頃の指導要領改訂では削除されてしまった。

経験重視は、その後、生活科を生み、十年後の今次教育改革では、小学生のみならず、中学・高校までも、総合学習が誕生することになった。詰め込み教育への反省からの改革だが、まだ完全に実施もされていないのに、学力低下が問題にされ、系統的な学習がまたぞろ復権を主張し始めている。

わが特殊教育はこのような「流行」（不易流行）とは無縁である。一貫して生活経験を重視する「生活単元学習」を継承・発展させてきた。「生活単元学習」を行うことで確実に子供の生活が変わり、いろいろな能力が身につく。

ていくことを諸先輩が証明してきた。保護者の方々もそれをはっきりと承認してくださった。子供たちの現実の生活からスタートしているからこそ、興味も持続し、追求も地に足がついたものになる。

今回正式に始まる総合学習は、必ずしも生活を追求の原点とするわけではない。その上、それを指導する教師も、小さい頃から記憶中心の指導を受け、系統的な学習には強いが、体験重視の教育とは異なる土壌で育てられてきた者が多い。指導内容の面でも、指導者の現況から言っても、「総合的な学習の時間」を定着させることは、よほど発想を転換しなければ難しい。

こんな状況の中で、合科的、生活単元的学習を極めてきた特殊学級の先生方が、この道の先達的作用を果たされるのではないだろうかとひそかに期待しているところである。



